≪座談会≫　その１

これからの私学と同志社

――卒業生の目に映った同志社――

――出席者（ＡＢＣ順）――

土　井　たか子（衆議院議員・日本社会党委員長）

秦　　恒　平（作家）

太　田　文　雄（株式会社東芝副社長）

――司　会――

北　垣　宗　治（大学文学部教授）

園部　初めに一言ご挨拶を申し上げます。今日『同志社時報』の座談会にお忙しい先生方にご協力をお願いしましたところ、快くお引き受けいただき、お集まりいただきましてありがとうございます。今日は「これからの私学と同志社――卒業生の目に映った同志社」ということで、これからいろいろお話をしていただく予定でございます。

今日、司会を担当致しますのは大学文学部の北垣教授でございます。ひとつよろしくお願い致します。

同志社在学の頃

北垣　それではさっそくですが、ご三人のそれぞれの同志社時代のことを、自己紹介をかねてお話しいただいて、それから本論に入らせていただきたいと思います。まず東芝の副社長でいらっしゃいます太田さんのほうからひとつよろしくお願いします。

太田　わたしは大学を出ているわけではありませんし、わたしの同志社というのは中学の同志社でして、ちょうど昭和十三年に中学へ入りまして昭和十八年に卒業した年代ですからだいぶ古いわけで……専門学校へ三年ぐ

らい行ったことになりますけれど、軍隊生活を経験してから半年ぐらい在学し、それから卒業したということですから、同志社の感じというのは中学のときがいちばん印象深いわけですね。私のところは京都の西院という、ちょっと西のはずれのところでありまして、その時分はまだ今のように交通機関が発達していない、やや田舎でございました。同志社中学へ入学した途端に、自転車に若い女の人が半パンツをはいて走っておりびっくり仰天しました。アメリカ人でした。「えらい国へ来たなあ」というのが私の同志社の実感でございました。この前ちょうど日経の人とも話をして、いろいろな同志社の思い出をと言われましたが、その時分の同志社というのは非常に自由な学校でして、府立の中学と違うよさがありました。その時分は、中学に入るには身体検査だけだったんですよね。ちょうどわたしは体を悪くして公立中学へ行けなかったんで同志社に行ったんですけれど、その頃には、江崎玲於奈とか、今の関電の社長の森井君とか、中学時代はそこそこの人がいました。その意味では非常に勉強もしましたが、遊びもしたという非常に楽しい思い出が中学にありまして、それ以来いまだにクラス会が続いてるのも、その時分の中学生活がよかったからだと思っています。新島先生のお墓へ朝早くから参らされたり、中学のときは強制的なところがたくさんありましたけれども、それが却って今となってはいい思い出になってるんではないかと思います。

専門学校へ行ったのは、ある先生に勧められ、よそを受けてすべり同志社高商が残ってましたから受けて入ったんですけど、同志社大学に対する同志社高商の当時の風習というのは反抗心が強うございました。創立記念日で横を向いてみたりするような、あの辺が非常にわたしにとってはおもしろいなあと思いました。在学一年余りで軍隊へ行ってしまいましたから、学校の思い出というのは岩倉村に通った思い出ぐらいでして、学校へ行ってるのか、飯を食いに行ってるのか、さぼってるのかわからんような学生生活を送ったものです。ただそういう学生生活というのは、今思ってみると中学のときがいちばん楽しかったし、高商のときはやっぱり軍隊に行かにゃいかんという……これはもうこれで人生終わりかもしれないという非常に危機感がありましたから、学校よりももうこれで軍隊へ行ったら帰ってこられないという感じのほうが強かった。帰ってきて半年ぐらいは学校へ行ったのですが、まだ格好だけでございまして、そういう意味では同志社の思い出というのは中学時代がいちばん印象が深いんじゃないかと思います。

同志社の自由な空気

北垣　ご卒業の順序になりますが、土井先生よろしくお願い致します。

土井　私のほうがあとなんですか。

太田　そうです。わたしは考えてみたら大正生まれですもん。

土井　まだまだ若くお見えになるから、わたしのほうが先だろうと思ってました。

私は同志社の法学部を受けるときに、国立大学も同時に受けてまして、両方ともまぐれ当たりだったんです。あとできっとお話が出ると思いますけれども、一つは学費というのが当時あんまり差がなかったんですよね。今のように目が飛び出るほど、国公私立間での授業料についての差が当時ございませんでして、その点ではいずれかということもあった

土井　たか子女史

んですけど、何と言っても、今自由の空気をおっしゃって下さいましたけど、わたしはやはり同志社の自由な空気……わたし女性なものですから、特に女性が行ったときになじみやすい空気というのは、もう長い間の歴史の中で培われてきてるということが非常にごく自然な空気としてありまして、それに第一ほれ込んだことと、やはり大学の門を入ったところにある良心の碑なんですよね。あの碑を見まして、やっぱりわたしはここだと思って行ったのが同志社なんです。

それで入学しましてから、わたしは弁護士になりたいという気持ちいっぱいで法学部に入ったものですから、初めは勉強しなきゃいけないという気持ちがあったんですけど、根が怠け者なものですから、よく遊びよく遊んだという場所でして、いろいろ今からして思い出ということを考えてみますと、授業でもあれこれ思い出はあることはあるんですけど、例えばいろいろ学費についても、それから雑費についても万事が親にすがりついてたものですから、ついつい無駄遣いをわたし自身がやりまして、あと経費が足りなくなったら必ずいちばん大事なところにしわ寄せが行ってしまうんで、いつの間にか腕時計がなくなってしまって、しかもその頃に試験ということになると、さて時間が困るんですよ。あと何分というのがそれこそ時間と競争になりますからね。困りまして目覚まし時計持って行きましてね。当時は女子学生が非常に少ないものですから、あたりから少ないだけの希少価値だけでわたしは問題にされてたようですけど、人が横向いてしゃべってる間に男子学生がネジ巻きまして、ちょうど試験の真っ最中にジーと鳴るように仕掛けられてるのを知らないで、途中でジーンと鳴り始めて大騒ぎになったというふうなことがありましてね。だからいつでも何か起こるときに、起こる場所にわたしはいるという相場がつくられて、知らない間に欠席裁判で自治会の役員をさせられたりね。あとでそれはだめだと言っても、決まったことだと押しつけられるというような、何だか今に至ってもそういう運命にあるような感じで、同志社のときからそうなってるのかなと思ったりしますけれども……。

そのお陰で、それ以前に女子学生になかった寮を作ることの運動をしなきゃならなくなりまして、園部さんそこにいらっしゃいますけど、当時は本部に何回掛け合いに行ったかわからないんですね。だからいつもそういう点では、きっと私は要注意のマークがつけられたんじゃないかと思うんですけども……。思想的にどうのこうのじゃなくて、何かことが起こるときにそこにいるという人間だったような印象をあたりに与えてると思うんです。

しかしそのお陰で、元田中に、それまでには予科の方が入ってらしたところが今度は女子学生の寮になりまして、一粒寮をやっとのことで作ってもらって、そこから通うことになったんですけど……。あそこからよく歩いて大学まで行ったんです。乗り物を使用しないで、ちょうどそれが歩くいい運動の距離な

んで……。今はわざわざダイエットやったり、運動不足だからというんだそうなんですけど、当時は、先ほど申し上げた通り、懐の都合でわたしは歩いていたということがよくあるわけでして……今にして思うとその行き帰りの思い出というのはいっぱいありますしね。

それからやがて〔十二月〕十九日になりますと、ここのサントリーホールで第九を歌うコーラスの末席を汚すことになるんですけど、よくキャンパスなんかではちょうどこの頃ですよ、第九の練習をやってらっしゃるとか、チャペルから夜遅くまで灯がもれて、わたしはさぼりでしたから、キャンドルサービスなんかでも当日に加わる一員でして、普段練習は全くしないんでよく怒られもしましたけどもね。遅くまで白い布をまとって、キャンドルサービスで今出川界隈を歩き回ったというのはよく覚えてます。だから学生時代といったら、授業の問題もありますけど、講義を聴いてた場面よりも、むしろ講義以外のところの思い出というのは、大変あれこれとあるんですね。本当に自由だったし、それから女性だからといって、特に分け隔てがありませんでしたしね。しかし大事にしたよと、男性の方に聞くと今頃になっておっしゃるんですけど。それは何も女性だからということでなしに、数はやはりどこに行っても問題なんですね。希少価値だということをわたしは今でも思ってますが……文学部はたくさんいらっしゃいましたから、横の連絡というのはやはり文学部もありますし、それから経済学部もいろいろ、当時の女性の方ではいまだにお付き合いをしてる方もあったりします。

秦　恒平氏

洛外から洛中をにらむ

北垣　それじゃ秦先生、お願いします。

秦　私は太田さんと同じ、西院のあたりで生まれたようなんです。それから東山区の八坂神社の近くへ移って、そこで育って、だから生まれつき、育ち柄、どうも洛外から洛中をいつもにらむというそういう行き方になってたんでしょうね。だから同志社大学を選んだときにも、やはり今土井さんがおっしゃったような自由、それも在野の自由ということがいちばん大切な尺度だったと思いますね。

それともう一つは、大学時代に余り具体的な大きな目標観を持つというより、大学を出てからのほうが自分の人生だという気持ちがむしろ強かったので、それに合わせて、入学したときにはもう卒業後に視線を向けて何か勉強する。だからどちらかというと今の土井さんのちょうど逆さまで、私は授業は非常にていねいに受けましたけれども、同志社の学内での学生生活というのは、意識して、ほとんど避けるぐらいに、むしろ学外で京都という町を勉強するほうが多かったろうと思います。ですから教室へ出て授業を受けてキチッと聴いて、そして済んだらすぐ学校の外へ出て、町を歩いて、そして家へ帰って、例えばお茶のけいこでお弟子さんのけいこをつけるというふうなことをやる、そういうことが多かった気がします。

それでいて、わたしは同志社に大変恩義を

太田　文雄氏

感じますのは、私は文学部で美学だったものですから女性が多くて、家内もそこで見つけましたし（笑）…東京へ、結果的には駆け落ちをしますときにも新島先生のお墓の前で二人だけで結婚式をするというふうな感じだったですからね。結局同志社大学は、同志社大学というより新島先生のお墓と、今おっしゃった良心の碑、それだけを持って東京へ来て三十年というのが実感です。だからついこの夏ですか、卒業以来初めて大学へ行って、アッセンブリー・アワーでお話をしたのですが、アッセンブリー・アワーなんぞには全く一度として出たことがなかったなあと誠に申し訳ない気持ちになりました。

それでも同志社大学の四年間を通じて、いちばん私自身の中で身についた感覚というのは、それはさっきの洛外感覚とも通うのですが、「公」よりは「私」のほうを大事にするという考え方ですね。「私」があって「公」があるんだという考え方と、新島先生のあの良心碑が、あるいはお墓のお弟子さんたちに囲まれての、非常に清らかな奥津城の感じなどが、私の中では価値判断的に重なってくるという気持ちですね。

私学は国のバロメーター

北垣　それでは本論に入らせていただきますが、「これからの私学と同志社」というテーマが掲げられておりまして、殊に私学といいますと同志社なんかはどういう役割を果たすべきなのか、こういったようなことで、今学内でも議論をしておるところでございますが、今日は同志社を卒業なさって政治の世界でご活躍の土井先生と、実業界の太田さん、そして芸術といいましょうか、文学の方面の秦さんという、それぞれユニークな仕事をしてらっしゃる方々から忌憚のないお考えを承りたいと思っております。順序はどなたからでも構わないんですが、いかがでございましょうか。

土井　固苦しい話を始めますと、やはり日本の大学の歴史を見ていきますと、大学はいったいどういう場所なのかということを考えれば考えるほど、私立大学、私学の存在なくして問題にできないんじゃないんでしょうか。だからまず私学ということから、わたしは今の大学の存在意義を考えなきゃいけないと思ってる一人なんですよね。やはり国立大学とか公立大学が尊重されて、私学が二次的に考えられる時代というのは、実は非常に危ない時代であり、怖い時代だろうとわたしは思ってるんです。右向け右という、その風潮が強い時代じゃないかと思いますね。抵抗をするとか、いろいろな意思表示を自由の気風の中でやることを尊重するとか、何よりも一人一人の個性を尊重して、人格というものを認めるということを考えてみたとき、公にしばられないで、むしろ公のあり方に対してどうする、こうするということを自主的に判断できるということを大事にしていかなきゃいけないんじゃないかなと思いますから……。義務教育と違いまして、やはり大学になりますと、私立大学をどれだけそれぞれの国は大事にしてるかというのを見るのも、一つのバ

ロメーターというふうに心得なきゃいけないなと思うんですね。だからいろんな国々の人と今お話しすることができて、わたしは実にそれが恵まれてるなと思うのが今の仕事の中身の一つなんですけど、それぞれの国の歴史を見ていきますと、大統領であるとか首相であるとか、そのときに私学に対する助成をどう考えるとか、私学の立場をどのように保証していくかということに対して力を費した人というのは、あとにやっぱりいい時代だったとか、いい大統領だった、首相だったと言われてますよね。そのことが、それだけの話じゃないんで、やはりそのときの施政全般を見るときの一つがそういう形で出てるとわたしはいつも思うんです。

北垣　宗治氏

北垣　その意味で英国のサッチャー首相はどういうふうに評価なさいますか。

土井　短絡的ないい方になりますけどね。それはそういう問題だけで見ると、率直に言ってあんまり特色ないですね。

出せ、私学のカラー

北垣　東芝ではいろんな大学出身者を採用してらっしゃいまして、同志社の卒業生が既に二百人とうかがいましたが、そういったこととか、息子さんが、同志社高校から早稲田に行ってらしたということもさっき伺ったんですが、そういったことも含めて太田さん、私学についてひとこと……。

太田　うちの会社は東京が主体の会社ですし、役員を見ても八割は公立大学、官立大学を出てまして、特に東京大学の人がとても多いわけですね。そういうことを言うと、大体日本の場合は、土井先生は特に政治をやっておられるけども、政治というのは官立のウェートが強いという感じがします。したがって商売をしていても関西の商売と東京の商売が違うように、やっぱり私立大学というのは、結果的に優遇されてない。財界を見ても、小さな会社まで入れると非常に私立の人が多いですけど、メイン企業というのは大体東京大学がどうしても多いですね。したがって土井先生が言われたように、私学のよさというのは、おのおののよさが自分で発揮できるような教育を受けてきた人は私学でも強いのでないですか。それを官立と同じようなスタイルで臨んだら、わたしは私学はだめになってしまうと思いますね。私学のよさというのは、どうしてもやっぱりその学校のスクール・カラーとか、そういうものをきちんと出していかないと……。官立というのはどうしても時の政治の流れに追随するような、一つの体制の中におる人が多いですからね。反体制派というのはおかしいけれども、体制に対して時には批判的になって、強い態度で、ある程度言い切れるというのは、自分に何か持ってないとできませんからね。やっぱり私学出のよさというのは、そういうところを、今先生がいみじくも言われたけど、そういう感じを持ってないといけない。体制派と同じこと言うてたら、官立大学の人のほうが日本の組織の中では強いですからね。そういう感じが、特にわたしはたまたま東芝に入って今みたいな立場になりましたけれども、我々の同期でい

ちばん不思議がられて、何であの人がなったのかしらて言われるんですけどね。そういう意味ではそういう意識を持ってないと、やっぱり体制の中に埋没してしまうという気がしますね。慶応、早稲田の人を見てても、やっぱり慶応は慶応のカラーがありますし、早稲田は早稲田のカラーを、やっぱり持ってますね。

土井　これはあるんですよ。政治の場所じゃ、政治家になる人たちに限って言えば、おっしゃるように早稲田は、私学の中では抜群に多いですね。稲門会というのがありますね。これは与野党を乗りこえて集まるんですね。その人数を数えていくと同志社というのは非常に寂しいんです。衆議院にも参議院にもポツポツ……。ポツポツにもまだ行ってないと言ったっていいと思いますよ。本当に寂しい。これは西日本全域に出が少ないということがあるかもしれませんけど、しかしちょっとその辺は……。新島先生のお考えに、まだその辺は遠く行き着いてないということが言えますね。

もっと理工系を

太田　我々メーカーの立場で言うと、私学というのは今の卒業生を見てても大多数が文科系ですね。やっぱり日本というのは、これから考えていったらどうしても情報化時代とか新しい頭脳が……。日本という国は資源がないですから、どうしても頭脳で勝負しないといけないとしたら、そういうことで私学の役割というのはあるのではないですか。

もう一つは、我々メーカーに工学部系統の人があまり来ないんですね。第三次産業へ結構行く。銀行とか証券会社。何で理科系の勉強した人たちがそういうところへ行くのかというと……。給料がいいということも一つあるようです。もう一つは、そういう企業が採る理由は、工学部の人というのは勉強しないと卒業できない。真っ当に勉強してる人が結構多いわけですね。文科系になると学校なんか行かずに、そこそこ試験受けたら何とか卒業できるという人がおりますから、それが会社に入ったときに差になって表れてくるのとちがうのかなあという感じがしますね。日本の今の環境から言うと、大学入るのは難しいけど、入ったあとは気楽に行けるという一つの問題点が、我々の社会に入ってくると問題が残るのではないですか。

マナーとモラリティー

もう一つは、今うちも海外から人を採用してる。アメリカ人やイギリスの人を採用してるんです。我々の会社は年間千何百人という人を採るんですけど、新入社員にひと月ぐらい導入教育というのをするんです。結局それは基本動作を教えてるわけですよ。今の人はマナーがないんですね。昔の人は家庭教育がきちんとしてたからマナーがあったんですけども、いわゆる新しい時代の人たちというのは、感性の人とかいろんなこと言われるんですけども。さてそういう海外のアメリカ人とかイギリス人が、日本の会社というのは何であいう教育するんだ。あんなことは家庭と学校で全部今までマスターしないといけないのではないかということを言うんです。その辺が、一つは私学のよさはそれがきちんとしてるという感じがするんですけどね。

土井　それは確かですね。それ全体を見るとモラリティーの問題だと思うんですね。だ

から外国からご覧になった場合に、日本というのは技術力が大変だし、経済力も大変な国だけども、モラリティーの点で言ったら遅れてますねえと言われちゃうんですよ。これははっきり言う人は必ず、いろんな表現で言われますけど、要するにそういうことだと思いますね。

歴史的感覚をもつこと

北垣　秦さんいかがでしょうか。

秦　そうですね、私は、元々官学とか私学とかという言い方そのものも余り好きじゃなくて、受けいれて来たことがないんです。私自身は官学でも私学でも、進学するときはどこでもいいという考え方だったし、今でもそうなんです。大学というのは、やはり主人公は学生だと思うんですね。だから学生の質がよくなれば、その大学がよくなるとまた完璧に信じなければいけないところがある。しかも、やはりその学生が、単に学問上のこと、知識上のことだけでなくて、今おっしゃったモラルの問題も、それから国のこれからの運命に対しても、どこかの段階で主役のように働くんだという自覚がなければいけないはずだと思うんですね。一時期、日本の国を広い意味の学生が動かしていたと思える時期がある。例えば明治時代がそうでしょうし、それから昭和へ入ってからでも何度か学生のエネルギーが爆発的に動いて国の曲がり角を作ってきたというときがある。それが非常に今弱くなっていることは、例えば韓国の今の状況などから比べてもはっきりしていると思うんです。それは決して政治的な行動的なものだけではなくて、そういう方面にも強い意欲で動く学生はほしいが、それと同時にやはり大学の中での勉強、学問、これももう少し本腰を入れてやらない限りは、学生が学生としてのメリットを、十分に持てなくなっている。現実に学生と接してみるとわかります。非常にイージーな通過儀礼のようにして学生生活をしてしまうわけですね。そういうふうにならない一つの基本、そしてもし官学、私学ということを分けて私学のことを問題にするのならば、最初に言いましたように、やはり「私」ということの意味を、学生一人一人が考えなきゃいけない。「私」が痩せて「公」が太る、そういう国ではいけないし、社会ではいけないんだということを学生一人一人が考えるようになれば、随分日本は変わるだろう、変わる可能性があるだろう、と、そういう希望が持てるのだけれども、しかし相変わらず滅私奉公で、むしろ「公」を立てることによって「私」はそれに仕えるという、そういうふうな人間観や社会観や政治観のようなものが学生の中に無反省に定着してしまえば、どんなに一般論的に大学の経営なり体制なりを改正していっても効果がない。これは学生が大学の主役なんだから、学生の一人一人がそういうふうになっていかなければしようがない。

　しかし学生がそういうふうになっていくためにいちばん必要な環境というのは、私はやはり政治だと思う。政治の環境が、例えば今問題になっているいろんな形での社会的な、しかも不公正な問題へゆがんでいく一方なときなど、学生もズルズルとそれに対する強い批評力を養われることなく、むしろそういう状況に対する断念や、あるいは看過してしまうというか、あるいはしらけて、それは自分の問題ではないという態度になってしまう。そういう態度で時代とかかわっていくようになると、ますますひどい方向に流されて

いく。だから私は、いちばん大切なのは、学生がもっと日本の歴史や、世界の歴史、鋭い歴史的な感覚を持って現代をよくとらえるような、そういう辛抱強い、しかも批評的な自覚を持たなければ、どのような議論をしてみても、大学は、よくならないんじゃないかという感じを持ってます。

中途半端な私学助成

土井　おっしゃる通りだと思いますけれども、学生というよりも、そのご両親がどういうふうに子供の教育を考えてらっしゃるかという場面を見ますと、すべてがそうではありませんけれども、よくわたしなんかお話をするときに、うちの子供はもう一つ出来がよろしゅうないんで、私立に行くためにお金がかかるんで弱ってるんですわと、こういうことをよく言われるんですよ。初めから学費は私立へ行く場合は高くかかるんだと。しかし自分の子供は、やはり私立にしか行けないから、それだけの覚悟をしなきゃならないと、こういう認識でしょう。これが第一、問題だとわたしは思ってるんですよね。なぜ私立に莫大な——最近は本当に莫大と言っていいですよ——学費が必要になってくるかということは、おっしゃる通り政治問題でもあるのですけど、そこでわたしはさっきも文部省のほうのいろんな資料をもう一度ひっくり返して見てみたんですが、国庫助成というのが問題になったのが昭和四四年、一九六九年にわたしが初めて国会へ出たんですけど、その翌年から話題になってるんです。翌年から始まってきまして、それでずっと年を追って見ていったら、一時期は大変これに力を入れた時期があるんですけど、昭和五十五年くらいがピークで、それからまたずーっと下がってきてるんです。これはやはり経費縮減という……。いったいどこにその縮減の中身をもってくるかといったら、まず私学の助成なんか露骨に出てるんですね。それからずっと横ばいで来てるんです。初めはこれを学校の経費の五〇%までにしようと言ってたのが二九・五%で、三〇%の手前で止まって、それからずっとまたダウンして元に戻っていってますから、六十二年度までしか今まだ出てませんが、昨年も恐らくこれからまた少し後ずさりしてるだろうと思う。一七%ぐらいだと思います。

　中身はどういうことかと言ったら、同志社について具体的に知りませんが、とにかく人件費に非常にかかるんだそうです。だから助成の中身は、まず考えるべきは学費を軽減するとか、それから学生の利用するようないろんな施設、それを整備していくために考えるとかいうことがまず先であろうとわたしは思うんだけど、実体はそうでないんで、大学の人件費を助けることが優先している。こうなれば私学の場合どうしても学費を上げていかざるを得ないという事情を抱えてるわけでしょう。私は、学生の頃に、田畑先生が、学生が学費値上げ反対で立ち上がって、学長として学費値上げに対してわたしも反対だと言って、理事会を相手にして、学内で大きな、学長の声明まで出されたんですね。

北垣　垂れ幕を……。

土井　学内の掲示板にこのことを貫徹しない場合は梨果を断つと書いてあったんです。当時、私たちは「梨果を断つ」というのはナシという果物かと思ったのです。違っていたのですね。ナシだけ断ったって、これは限られた話で、そんなことなら誰でもできるでしょうと。梨果というのはお菓子類一般を断つ

ということですと。へーっとわたしたち言ったんですけどね。鮮明に覚えてますが、あれは非常に意味が大きいわけで、そののち学生もその辺は無気力です。私学というのは学費が高いものだと決めてかかってるという点は大変な間違いだろうと思うんですね。だから私学の助成の問題は、わたしも国会へ出てから目を光らせてるんですけど、率直に申し上げさせていただいて、同志社はその点はあまり熱心じゃないんですよね。だから全国の私学でどれほど助成の問題について考えてるかというランキングがあるんですが、交付の中身の一覧を見ていって、同志社はなかなか出てこないんです。やっと出てきて、その順位というのは、上位五十校の中で約半分ちょっと超えたところで出てます。

サポート、バット、ノウ、コントロールの原則

北垣　その熱心さというのは、どういう意味でおっしゃってるんですか。

土井　助成というのは本来「サポート、バット、ノウ、コントロール」でしょう。その助成の中身に対してはこのように考えることが大事であって、大学の本旨というのはこういうところにあるということをもっとはっきり鮮明にして、そのための努力をしてるというところが見えないというんです。

北垣　帰って報告致します。(笑)

太田　わたしらの会社ですと技術が主な会社ですけど、公立大学というのは、土井先生が言っておられる産学共同というんですか、冠講座を多くしたいというところがあるんですよ。それは先生の費用から助手の費用、全部という何千万というのを棒引きしてもらえるわけです。一緒に研究して、新しい研究をやろうというのが、いろんな国立大学にあって、東大なんか圧倒的に多いですよね。そういうことから言うと私学で熱心なのは早稲田とか慶応とか、あれはまた熱心なんですよ。だからその辺がやっぱり東京と関西で政治的に動くのが下手なのかどうかわからんけれども、その辺のしつこさというのは、同志社はちょっと弱いのではないですか。

土井　産学共同というと、これは大学側がやはり大学であるということに対する自覚をしっかり持ってないと、非常にこれが問題を起こす元になってまして、最近の帝京大学の八億円問題なんていうのは、これはやっぱり私学の現状を露呈してるとわたし思うんです。ただああいうことがあったらその次の年には……。

太田　ドーンと減らすと。

土井　ということは社会の声でしょうが、現在のシステムではひっかからないんです。傾斜配分というのがありまして、私学に対する助成のパーセンテージで、どういう大学に対してより効率よく助成するかというのを決めているのは、例えば定員の数に従って、定員オーバーしてるところは、ご承知の通り削られますよ。だから定員に満たないで半数ぐらいのところって、また大変削られます。だから定員通りに学生がいて、そしてそれに対して授業も満遍なくやられてるというところ、むしろそれだけを問題にしてるんです。だからわたしは今の助成のあり方に対しても大学側は注文をつけるべきだと思う。やはりサポートはするけれどもコントロールしてはいけないというのが鉄則ですが、コントロールばっかりしてサポートがないというのが現状でしょ。サポートに対してもっと注文つけると同時に、コントロールはお断りと。その代わり我々が考える大学の方針というのは

このようにしていきたいということを鮮明にしないと……。会計検査院はもっとしっかりしてくれとおっしゃるべきです、とわたしは思ってますよ。

税制の問題

太田　それと先生、私学にいろんなお金を出すということに税金がもっと安くなれば、もっと良いのですが。

土井　それもありますね。

太田　今のままの税制でいってたら、私学なんかに寄付する人ないんですね。

土井　そう思いますよ。消費税なんていったらあらゆる大学の経費にかかりますから、これまたわたしが反対するといういわれは、やっぱり大学を考えれば考えるほど消費税はいけませんね。この前、「同志社大学広報」の中に「大学に課せられる消費税とは」というのを書いてらっしゃいました。同志社大学の現状に合わせて消費税を考えたらこうだと書いてらっしゃいましたけど……。

北垣　入学金には消費税がつきますね。授業料にはつかないです。

土井　そうなんですよね。

太田　それともう一つは、沢山の人たちが試験を受けるから、というので、また難しくなってるでしょう。

北垣　それも事実です。

発想を変える必要

太田　それで学校へ入ったら遊んでいこうという……。遊んでいこうではないけど、気楽にいきますわね。あの辺は直せないのかなあという感じしますね。

北垣　私ちょっとそのことに関してこういう理屈があるんです。つまり、結局日本の社会が学歴社会でしょう。よりよい大学に行こうという熾烈な競争があって、幼稚園から全部組み込まれているということです。同志社に来る学生さんも、たまたま自分の偏差値が同志社に合うから来るのであって、新島先生の理想に共鳴するとか、同志社の教育受けたいから来るというわけじゃない。そういう状況と、いわゆる入試地獄というのがありますけれど、この入試地獄の熾烈さは、同時に日本が戦後諸外国と競争してここまで成長してきたエネルギーと、根は同じじゃないだろうか。もし日本がこれにこんなにがんばらなかったということであれば、やっぱり入試もあんまりきつくならなかったのではないかというふうな気がするのですが、こういったことで太田さん、いかがでしょうか。

太田　今まで結局産業立国といいまして、とにかく休みも休まず、例えば海外へ売りに行くとか精一杯やってた。今になって海外なんかへ売りに行ったら怒られるわけです。輸出振興したらいかんというわけですよ。したがって現地にどんどん生産を移してますわね。そうすると今までというのは、日本で英語のできる人は海外へ売りに行ってたのが、今はもっとグローバルにものを考えて、現地にどんどん住み込まねばいかんようになってきたわけです。現地に工場作ってるわけですから……。今までアメリカへ持って行ってた商品をアメリカで作るようになってきたわけです。そうなってくると日本のほうが結果的に空洞化していくということですね。そうするとある程度の人間は全部海外に移すという考え方が必要になってくる。そうすると発想を全然変えていかないといけないわけですよ。

北垣　実は現在の入学試験が非常に難し

い。この状況を解決するいろんな方法を考えてみましたけれども、現状では理想的な解決は不可能です。これは日本民族の、この馬力と同じ根から出ているのだから、というふうに今私は思ってます。

土井　そうですか。

北垣　これは一挙には直らない。日本人が、まず学歴社会を直すことできますか。徐々には直っていくかもしれませんが。

太田　学歴社会を直すというよりも、我々の会社を見てまして、今まで工場で中学出た人とか、いわゆる労働者というのを雇ってたわけです。今は中学出て、入ってくる人は少ないのです。高等学校で採る人も少ない。また大学へ行かずに残ってる人というのはちょっと採用できない。そこで本当に工場で中心になって働く人とか、海外で中心になって技術を教えるような人というのは少なくなってる。全部大学生に代わってるわけですね。大学出だけど昔の職工のやってたことをやる形になるわけです。その辺でものすごく中身が変わってきてるんですね。ですから工場を見てますと、古い工場なら四十とか四十五歳の直接工がどんどん増えてきました。あと入ってこないわけですから。その辺が非常にこれからいびつになってくると思います。誰を見ても大学生という感じになってくるでしょう。例えば我々のところですと毎年千人以上採ってるわけですが、考えるとみて、例えば部長職は何人と大体は決まってるわけでしょう。組織がどんどん増えてきますけれど、千人も入ってあの人の将来どうなるんだろうと考える。我々のときは競争相手が少なかったですから比較的よかったけれども、例えば当社のいちばん上の一段部長さんというのがおりまして、正規の部長というのは大体七十人ぐらいしかおらない。二段部と三段部と部がありますからね。その七十人が、例えば千何百人入ってくるわけでしょう。それが大体三年か四年ぐらいの層から七十人選ぶとしたら、もっと割り切って自分の専門を生かしていかないと、やってゆけない。今までなら何とか格好ついたけど、これからの社会を考えると、高学歴社会だし、そういう会社の組織からいうと、どんどん新しく発想を変えていかないとですね。だんだんは定年を延ばしてるわけですから、今六十歳ですから、もっと先になったらもっと延びるのではないかと思うんですね。そうなってくると仕事の中身というものをどう考えていくのかとか、発想を変えていかないと……。

イギリスの大学生

土井　本当にそうです。自然科学系だったら、大学の学部で専門的な知識を身につけるという機会もあるかもしれませんけれども、文科系だと、大学を出て、それから、大学教育というのがその人のこれからの人生とか社会にどれほど有用なものになり得てるかというのはクエスチョンマークだとわたしは思うんです。

　この間、イギリスのエジンバラ大学の先生と話してたら、その先生が次のようにいわれるのです。イギリスは日本とシステムが、ご承知の通り違いまして、大学に行ける人、特にケンブリッジとかオックスフォードに行ける人というのは、小学校に入学する頃から決まっていますね。自分がどれほど頭がよく、そして能力があって才能があったとしても大学には行けないと決まってる人たちが、高等学校に行ってそれからといったら、工場で働く職人になるとか、それから商店に出て行っ

てそこでものを売ることが仕事になるとか、もう早くから決まってるわけでしょう。むしろ文学部の学生と話をしててつくづく思うのは、大学に来ないで、早くから仕事をしたほうがどれほど有用な人生をその人自身が送ることになるかと思う場合がある。なぜそんなことを言うかというと、新入学した学生に、今から講義をするが、その前に十分間話すことをノートを取らないでじっくりわたしの話を聞いて下さいと言って、十分の間に四つのことを話してから、さあペンを取って、さっき話した四つのテーマをそこに書いてみてごらんと言ったら、正確に書ける学生は殆んどないといってよいのだそうです。そしてその中で一つか二つ書く学生が大体七割くらい。あとのテーマは思い起こそうとしたって、ちょっと浮かんでこないという……。こっちの話し方にも問題があるかもしれないけれども、大体そんなことでしょう。だから大学の学生の間にあれもこれも身につけようとしても、できることではない。一つだけでいい持って出ることを大事にとわたしは言うことにしている。それでそれは何かということは押しつけない。発見しなさいと言っています。ただ学生は非常に真面目で、一生懸命ノート取りに大学へ出てくる。そうじゃないと、あとで単位が取れないからということであるかもしれないけれども、ノート取りはやってみても本当に身につかないと私は言ってるんですよという話なんですね。

イギリスに比べると、先ほどからのお話の通りで、大学までの詰め込みがすごいんで、詰め込んでないと合格できませんからね。そこでほとほと精も根も尽き果てて、大学ではくたびれ果てた学生が、それからの学生生活に入っていくという格好でしょう。そこでは大学の勉強にとまどっている具合に思われてならない学生が、大学を見てるといるんですね。単位さえ取ればいいと。

厚かましさに欠ける同志社の学生

太田　我々の会社でも今まで優がいくつあり良がいくつあった人をまず一つのふるいにしようということがあったんですけど、可があっても特徴のある人は採ろうというのが非常に強くなってきましたね。そういうことから言うと、成績見て大したことないけれども……、最終面接員というのがあるんですよ。役員の最終面接なんですけど、わたしは実はサッカー部でマネージャーをしまして、カラオケ歌ったら最高にうまいですとかピー・アールをするんですよ。そんな人を却ってよく採りますよ。わたしは勉強してきましたとか、自己ピー・アールができなかったら、非常にそれは損しますね。そういうことから言うと、わたしは同志社の人というのはそんな厚かましさがなくおとなしいから損しとるのと違うかという感じがします。例えば明治の学生とか、こっちの東京の大学生なんか結構その辺のピー・アールがうまい子が多いわけですよね。やっぱりそういう点から言ったらおとなしいのではないかという感じはしますね。

創造性をどう育てるか

北垣　二十一世紀にどんどん迫っていくわけですが、本当の意味で創造性ということを問題にすると、今のような大学制度では、国立も私立もみんな非常に大きな問題を持っておりまして、殊にこういう入学試験制度を持っていますと、創造性を試すような試験は、数万人の受験生に対してはできないわけで

す。とすると、創造性を本当の意味で伸ばさせようと思ったら、同志社には自由というすばらしい伝統があることを前提にするならば、思い切り四年間遊ばせるのがいちばんいいということになるのでしょうか。自由にやりなさいと。あんまり点数のことを気にしなさんなと。勉強したければ大いに勉強しなさい。遊びたければ大いに遊びなさいというふうに学生に言うのが、いちばん二十一世紀向けのいいやり方なんでしょうか。つまり教師は教師根性がありますからもっと勉強せよと言わざるを得ないんですけれども、しかし同時にどうも社会の方々からは、特に工学系の方が言うことは、自分らは大学での教育には期待してないと。入って来たら自分らで大いに鍛える、そして使えるようにするんで、それこそカラオケも歌えてノイローゼにならないだけの精神的な強靱さと、負けじ魂のようなものさえあればいけるんですと。その辺をどういうふうに……。

太田　技術系の人はしっかり勉強をして、その成績はともかくとして、そういう勉強するベースロードがなかったら会社へ入って教えないとだめなんですね。やっぱりその辺は、先ほど技術系というのは、我々は個人で教えますから、アカも落としていきますわ。技術系というのは落第も結構させてるわけです。文科系というのはあんまり落第というのはないわけです。大学で五年も六年もかかって卒業する人がおるわけですよ。文科系というのは自分で遊んで六年かかる人もいるかもしりませんが、技術系はやっぱりちょっと厳しい、のとちがいますか。わたしはそういうことから言うと、日本のこれからを考えたら、クリエーティブとわたしもよく言うんですけども、東芝でずっとわたしも家電をやってたものですからずっと見てますけれども、コンシューマーが使うような商品というのは、うちの技術屋さんで半分ぐらいは大学院ですが、国立大学の大学院で基礎研究をした人が家電なんか来たってだめですよ。相模工大でも、熊本工大でもいいから、私立の工学部を出てフリーに発想できる人のほうが、いわゆるいいものを作るわけですよ。

土井　それ、わかりますね。

太田　半導体とか、それから超伝導とか、今反対される原子力の問題とか、基礎的な大事なことはきちんと大学を出て、それからまた研究してる人がやったらええんだけど、こういう感性というのは私立の学校って結構あると思うんですよ。やっぱりその辺によさが出てくるのとちがうのかなと思います。今言われたように、遊ばすのがいいということは、やっぱり自由と同時に感性が非常に豊かな人間というのは学校でどういうふうにして作れるのかね。これは本人の特性もありますが。

ワープロ対毛筆

もう一つは、例えば海外へ行くとき飛行機に乗ってますね。アメリカ人なんか飛行機の中でパソコンをパッパッ、いじってる。あるいはワープロも打ってるわけですよね。日本人というのは子供のときからタイプライター打ってないから、すぐなじめないわけです。先週北海道新聞へ行って、編集長さん他に会いまして、これからは記者というのはワープロと電子カメラ持ってたらいいような時代が来ると。電話線でパッとつないで記事はそこからワープロで打ったままスッといけるというわけで、そうするとこれからは文科系の人でもパソコンをいじってちゃんとやらなかったらだめだともいえます。新聞記者が鉛筆と

ノートで細く線なんかつけて記事書いて、そんなことやらずにワープロ打ってサッと電話で送れるようになってくるんですね。そういう情報化時代になってきたら、やはり文科系の学生もそういう素養はね。アメリカの学生、それは全部持ってますよ。

秦　私は暫くの間ですが早稲田大学で文芸のゼミを引受けていたのですが、文科系の学生でもワープロの論文や作品を作る人は、断然増えてますよ。

太田　それがベースロードになるようになっていったらよいという感じなんですよね。

秦　非常に、機械には全体に強くなってますね。

太田　それをやらなかったらこれから、わたしらは時代に遅れたと思ってますよ。

秦　語学と、それから機械が使えること、それがいちばん大事だというふうに学生も思ってるようですね。

太田　就職のためにやってる面もありますけど、それがベースロードですよ。

土井　それが使えなかったら、乗り遅れたり、とても一緒に生活を共にするというリズムから外れちゃうということは、はっきり言って言えますよ。だけどやっぱり字というのは人が自分の手で書いた字を通じて、その人の心とか気持ちとか、その人の特性なんていうのは感じ取るんで、これを大切にすることが忘れられたら悲劇ですね。

秦　でも、同じようなことは、例えば毛筆から万年筆に変わるときにも随分言われたんですよね。つまり毛筆でないとだめだ、万年筆では人間までだめになるというような議論があったんで。恐らく今の動向からすると、勢い万年筆よりワープロになってくるだろうと思いますね。

感性の問題

土井　だからビジネスライクにやってるのはそれはおっしゃる通りだろうと思いますけど、やっぱり人間の触れ合いとかというふうなところは、そうであればあるほど大事に考えられていくという傾向も、これは出てくると思います。

太田　今言ったように、一つは感性というのがありますね。これは体制の中の公立大学の人に感性と言っても無理かもしれない。技術の人は感性のことはわかりますよ。何でこれが売れるんだ。理由があっても売れないですね。結果的に最終ユーザーがセレクションするわけですから、何でなんだと言われたら、それを計算できないんです。わたしも営業やってるものですから、営業というのは魔術だと言うんです。製造とか技術は科学であって分析できるわけですよ。営業というのは魔術でわかったようなわからんことを言っているわけですよね。感性というのは計算できんわけですね。その辺が、時代時代によって感性が違っていきますから。私立の学校のよさというのは、それが非常に豊かにあるかどうかやないかと思ってるんですがね。

北垣　それを養うものはやはり課外活動の音楽とか、あるいは山を歩くとか、あるいはスポーツとか、そういったことなんでしょうか。教室で感性を教えるということは……。

太田　それは教えるんじゃないですよ。それは自らが……。学校の雰囲気とか、学園生活とかいろんな中で、やっぱり全体で醸し出されるものとちがいますかね。こういうことをやったら感性が養えると判っているのなら我々の会社はどんどん養いますよ。それができない。

土井　最近一つの動きとしたら、よくこれ国会の中でも問題になったんですけれども、○×教育でずっと教育を受けて育っていくわけでしょ。そうすると例をちょっと挙げれば、「雪が融けたら何になる」と言ったら「水だ」となるわけですよ。ところが中には「雪が融けたら春になる」ということを考える子供もいるわけですが、そう答えたんじゃだめなんですね。やっぱり「雪が融けたら水になる」というのが合ってると。それ以外は全然だめというのね。やはり詰め込みでやられますと、そうでなければならん、それ以外はだめなんだというふうなことが知らず知らずのうちにしみ込んじゃうんですね。ものを受けとめるときにもそうだろうと思うんです。そうすると、おっしゃるような感性というのは培われていかないんですよね。

選抜方式にも同志社色を

太田　そういうことから言うと、学校の選抜方式とか、例えば同志社は英語と何かが強かったら入れる学校とか、何かその辺のアクセントをつけたらよいのではないか。それをやっぱり総合点でよくなかったら入れないということをやってますと、結局、慶応と早稲田と見てますと、だんだん発想的にスモール東大になってきます。慶応、早稲田へ入ろうと思ったら、だんだんそういう人でないと入れなくなってくると。却って、例えば亜細亜大学とか青山学院とか、そういうのがよいのかもわからんということになってきますね。やっぱり学校選抜方式にややカラーが出てくる方法はないのかなと。

土井　思い切ったものを作り出したほうがいいんですよ。

太田　ぼくは家を京都に置いてますから、たまに京都へ帰るんですけど、親戚その他から、あなたが同志社へ入ったときのようにはなかなか入れないと皆に言われる。京都の人で同志社へ今入れないんですよ。入ってるのははるかに少ない。みんな大阪とか滋賀県の生徒が圧倒的に多いでしょう。京都の同志社大なのに京都の人はものすごく少ない。京都はやや平均感覚で見通しますから、ある意味では非常によかったかもわからんけど、同志社へも入れないというのはよく言われますね。そうすると京都大学入るのと、同志社へ入るのとカラーのちがいがなくなってくるの

とちがうかなあと思いますね。その辺をどういう具合に特徴を出されるのか。あんまりそれを出してたら偏った生徒しか来ないという心配があるのかもわかりませんけどね。

北垣　一つは、慶応、早稲田にないものはキリスト教、つまり新島襄が伝えた自由の精神というようなことに最終的にはなっていくと思います。それをどうこれから先の教育に生かすかというのが、現代の同志社の重要な命題だと思います。

土井委員長の早稲田講演

土井先生、早稲田を訪問なさいまして講演なさったりしてらっしゃいますし、そして太田、秦の両先生はお子さんを早稲田にやってらっしゃり、また秦先生は早稲田で二年間お教えになったりしておるんですが、そういった早稲田、慶応なんかと比べてご覧になって、今ミニ東大になりつつあるというご指摘なんですが、その他のことで何かお気付きのことはありませんか。早稲田について……。竹下首相の母校だそうですが……。

土井　そうなんです。政治家の中に多いんですよね、与野党を通じて……。この間大隈講堂に参りましたけれども、それも大学側から言われたんじゃないんです。とにかくわたし忙しくて日程がとても取れないと言い続けたんですけれども、日参されまして、そして頼む頼むと言われて、学生が自主的によんで来て話を聞こうじゃないかという機会を作られたわけですから、わたしをよんでこようと言われた学生さんは、別にサークル活動とか、そのために自治会運動をやってるという学生じゃないんですよ。だけど、やはりその熱心さにしまいに根負けして、とうとう無理な日程の中で行ったわけですよ。ただ学生のほうの受けとめ方というのは、率直に申し上げますと、何か一つを得ようとか、それから聞いたことがそののちの自分の、ものを考えていく基準の一つになるかもしれないと考えられた学生さんもないとは言えないかもしれませんけれど、楽しく話をきこうということだったんではないでしょうか。看板をたくさん立てたり、そして似顔絵を描いて大きく貼ってあったりね。もう大変それがにぎやかだったですよ。それで行きまして、向こうの学長さんは法学部の先生ですが、西原先生よく存じ上げてるんでいろいろ話をしてましたら、フィリピンのアキノ大統領が来られたときにやはり大隈講堂で……。そのときにも学生は熱烈歓迎でいろいろ準備万端、随分苦労してたようですが、今度はあのときと同じぐらいですよと言われたんですね。行ったら講堂に入り切れなくて、お昼時間、一時から始まりますから結構みんな入ってこられたんでしょうけど、行列ができてるんで、ははあ、食堂の行列だなと思ったら違うんです。大隈講堂に入る行列だったんで、それで随分外で入れなかったといって、帰るときには待って下さった人が多いんですけどその待ってくれてた学生もみんな集まって、予定してたんじゃないんですよ、帰るときにわたしは「皆さんさよなら」と言って大隈講堂の前で挨拶して車に乗ろうとしたら、一人が「都の西北」をやろうじゃないか「そうだ」と言って、三百人ぐらいだったでしょう、ワーッとみんな歌い始めました。期せずして歌い始めた。それは予定してたことじゃないから、みんな学生もそうだと言って、そこでそうなったんです。非常にわたしは感激しました。純真だし、何か渇望してるなという感じがしますね。だから何か求めているものをどこにもっ

ていって、どういう形で表現したらいいのか、そういうことについて求め続けてるという、そういう雰囲気が非常にありました。

「ワン・パーパス」は出ないか?

太田　例えば先生が同志社へ行ったとき、サッと期せずして同志社の校歌をパッと歌う雰囲気かというとちょっと違うでしょう。

北垣　同志社ではそうならんような予感がします。

太田　それは何でなんでしょうね。

北垣　それ、本当に私も答えを捜しあぐねてるわけです。

太田　ぼくはよく得意先のいろんな方の結婚式に東京で出るんですね。何百人もの結婚式に出ましたが、慶応が圧倒的に多いです。我々のビジネスの社会の人は、息子さんとかは慶応出の人が多いんですね。大体最後というと必ず校歌を歌うときサッと人が集まるでしょう。その辺の雰囲気……。同志社の卒業生の結婚式は、そういう雰囲気がなかなか出てこないんですね。やっぱり上品なのかね、おとなしいのか。

北垣　関西でやれば、それは「ワンパーパス」です。

太田　やりますけども、それでもあっちのような感じと違いますね。何でなのかな。上品なのかなという感じがするんですけどね。

北垣　シャイなのかもしれません。一つには、やっぱり今こういう情報化の時代ですから、土井たか子委員長のようなネームバリューのある方が来られるとワーッと集まるという、これはやはりあるように思います。ですから私の最近の記憶でいちばん多かったのは広中平祐さんを大学のアセンブリー・アワーによんだときはチャペルが満員になりました。広中さんお一人でもそうなりますが、普通の場合、もう本当に来ていただいた方に気の毒なぐらいです。チャペル・アセンブリーアワーで普通の人がやるときには、本当に寥々たる数ですから、これ何とかしなきゃなりませんけれども、何ともならないというのが現状です。大変残念ですけれども……。ですから同志社の中でもキリスト教教育というのは、来当にこれからどうするか。試練に立たされてるという気が致しますね。

土井　早稲田に行ったときには、わたしはやっぱり安部磯雄先生の話とか、いろいろ同志社から早稲田に来られて、良心を運んでこられて、それをここで大きく広げられたという方の話をしたんですよね。そしたら早稲田の連中があとでまた電話をかけてきたりして、「東の早稲田、西の同志社」と言われたけれども、実にそれには並々ならぬ今までの歴史があるんだというので感激したとか、いろいろあったんですけどね。今度は同志社に対してそれを持ち運んだときに、同志社がそういうふうな反応になるだろうかというのを、ちょっとわたしは今考えてるんです。

北垣　なりにくい……。

土井　十六日には同志社の法学会に行きますけどね。

北垣　大きな看板を私見ました。似顔絵は見ませんでしたが。

土井　自主的に色々工夫されているのでしょう。

学生の深い孤独感

秦　わたしの学生を見てる感じからすると、学生の一人一人は、今非常に孤独感というのをいちばん強く持ってると思いますね。特に小説のような作品を提出させてみると、

それが上手とか下手とかということ、あるいは主題とかかわりなく、いちばん濃厚に、しかも本人が思ってる以上に濃厚にしみ出してくるのは、どんな派手な恋愛をしていても、どんなにぎやかな同好会生活をしていても、極めて孤独な不安定感です。それでいて友情の問題でも恋愛の問題でも、あっという間に心と心の切り離れていく頼りなさを、不安とも悩みとも意識していない。また気がついてもいないのじゃないかと思える。しかも実にそのような形で根深い孤立と孤独を表現している。それが例えば早稲田のあのような活気が一見ある大学の中ですらそうでした。そして一人一人と話し合ってみると、やはり孤独感というのは強いですね。しかもその孤独をどの方向からいやしていくかということを自分で考えあぐねている。例えば不安や孤独感それは望みのところへ就職すればいやされるのか、恋愛がうまくいけばいやされるのか。もっとほかの形でいやされるのか。そういう自覚がなかなかつかめていないんですね。そんな孤独感の根の深さのようなものを学生があれほど抱きこんでいるということは、日本の社会全体に広げて言えば、もっと深刻に孤独の根は拡がっているはずだと恐れます。しかも、そういう学生の孤独感を尋ねていくと、大学生活が言ってみれば産業の予備軍のような形で、いつか迎え入れてくれる産業社会への強いられた予備生活をしてるという気持ちでいるわけですよね。じじつ太田さんのような方は、言ってみれば産業に適した人材を求められるだろうし……。しかしそれだけでは大学時代の四年間は余りにも辛いし浅いという気持ちを持っている子が多いんです。あげく思考停止して遊んで不安をまぎらわしています。高等教育という高等感のようなものはもうほとんど置き忘れて、そんな意識を持ってる学生はまずいない。高等な学問を四年間で何らか手につかもうなどと思ってる子は、まあほとんどいませんね。むろん彼らのそんな人間的な孤独を、彼ら自身の力でいやしていくすべなど持合せていない。その手伝いをしてあげる力がこちらにもない。それでとても辛い思いをすることが、学生の作品を見てるとありますね。

同志社のような新島先生の精神やキリスト教の精神のようなものを土台に持っている大学ではどうだかわかりませんけれども。だいたい大人の我々も割と大まかにやれ個性を、それ感性を掘り起こせばいいと、そこまでは誰でも言うんだけど、どうしたら掘り起こせるのか、どうしたらその感性が培われるのかという具体的な方法は出してやれないんですね。水際へ連れて行くことだけはできるんだけど、水を飲ますことはできない。しかもですよ、現実がそうあろうと、なお、その学生こそが、大学の真の主人公なんだということを考えなきゃいけないと思いますね。それが忘れられてしまって、大学の経営とか、あるいは私学全体の社会的、経済的な経営の努力、そういったようなところへ大学問題の焦点がいってしまったときには、学生の、ひいては社会の孤独という形での人間的な荒廃はどんどん進んでいく。わたしは二十一世紀へかけて、大学の持っているいちばん人間的な大きな課題は、この孤独感をどうするかだと思う。

安易な人間理解

北垣　そうすると一九六九年を中心に全国に吹き荒れた学園紛争、あれはその孤独感を何とかして克服できはしないかという学生側

の一つのあがきの結果だったというふうに思われますか。

秦　わたしはそう思うんです。今もいうような孤独感を見ていますと、割と人間に関する理解のようなものが、今の学生は浅い。人間とは何か、自分は何者か。そういうふうに自分の心の奥をのぞく、人間形成ができてないんですね。これは親の世代もできてないのかもしれないけれども。だからどうしても既成の安い約束事だけを土台にして物事を発想する。例えば親子とか夫婦とか兄弟とか、あるいは師弟とかという、名前だけででき上がっている既成の人間関係を安易に頼りつつ世の中を考えています。自分にとって、例えば本当の身内というのはどんなものか。それから他人とはどういうもので、世間とはどういうものかということを鋭い反省や認識でキチッと考えていくことができない。だから名ばかりの夫婦が世間には一杯あるように「兄弟は他人の始まり」のような兄弟がいっぱいあるように、そういういわば陋習と同義語的な孤独がどんどん社会を浸蝕している中で、大学生活の中でも学生一人一人が孤独の度を深めているという状況。わたしは、いちばん危機的なのはそういう心の問題だという気がするんです。土井さんが早稲田へお出でになって、たくさん集まって感激する。彼らの感激はわたしも近くで見ていますからわかります。その感激は、しかし極端なことを言うと一瞬のうちに雲散霧消していきます。それは単なる一つの風俗的馴れ合いなんであって、それを通して心の中に降り積もるような人格的な形成のようなものは失礼ですが少しも進まない。なぜかというと、昔は偉い人になる、人格的なものを磨くために学問をした。しかし今は学問は、例えば東芝へ入るためにとか、日立へ入るためにとか……。

太田　そこまで具体性はない。（笑）現状は不毛ということを言われるけれど、やっぱり何で大学へ行きたくなるのかね。親に勧められてとか……。例えばそれは小学校からのプロセスがあるでしょう。今は団塊の世代の子供がだんだん大きくなってきてますね。入試戦争を経た彼らの子供が今度出てきてるわけですね。そうすると彼らは自分が苦労したから子供に苦労させたくないとか、そういうことがだんだん変わっていってるのとちがうのだろうか。朝早うから子供が塾へ通っていますね。あの生活を見てたら、例えば我々の小学校のときどうだったか。あるいは中学のときどうしてたかといったら割合のんびりしてました。それが今は全部が進学……。三年、三年という区切りもありますけど、普通の学校へ行ったら三年ごとに試験受けなければいかんわけですよ。そういうプロセスの中でいきますと、今は隣の人が競争相手なんですから……。以前はそういう感じはなかったですよ。そうかと言って、学校のとき、成績順番に並ばされるのです。試験ごとに成績順番に並ばされる。そういうことがあって、今隣にいる人に負けてはいかんという、その程度でしたね。

同志社を廃学する覚悟

秦　大学がどんどん大きくなっていくでしょ。そうすると大きくなればなるほど、慶応も早稲田も同志社も同じような大学になっていくんですね。だから非常に逆説的な言い方をすれば、新島先生の精神が守れないのなら、同志社はつぶしたほうがいいじゃないかというような発想にまでいかないと、さっきおっしゃったような大学ごとの感性とか個性

とかというものは本当は守れないはずだと思うんです。しかし各企業が前年同期何パーセントアップの利益を求めて皆ノルマでやるのと同じように、大学も、あそこがあれだけの学生を持ってるのならこちらもこれだけを……。校舎を建てなきゃならない、教授を増やさなきゃいけない、学生も講座や学部も増やさなきゃいけないし、学費を上げなきゃいけない。それをやってたらどの大学も同じようになってくるのは当然だと思うんですね。だから今の同志社当局の中に、新島精神がもう生かせなくなったら、いさぎよく同志社をやめてしまおうかというぐらいの発想までがあるかどうか。それが学生の中にもあるかどうかですね。あるいは学生の中にそういうふうなものが出てくるバネを、「同志社」が用意しているのかどうか、それがわたしは心配ですね。

北垣　今非常に厳しいご批判をいただいてるわけですが、私見ておりますと、やはり本当に心ある学生というのはいつも少数だという気が致します。少数の心ある学生は、教師が考えてる以上に考えていて、そしてやっぱりこの四年間をどう過ごすかということを本当に考えておりましてね。二万人の学生を抱えておるので一人一人に当たることできませんけれども、ごく少数そういう学生を見つけて時々安心するんです。

それと若王子で、今でも十一月二十九日の創立記念日と、一月二十三日の新島襄の永眠の記念日には、六時半から早天祈禱会をするんです。そうするとあそこに四つの中高、女子大、大学、二百人から三百人、四百人ぐらい、どんなに寒くても集まります。あの馬力にちょっと感心してるんです。これには強制的な面も若干あるんです。でも大学生が案外来るんですね。それから女子大生……。この祈禱会が続く限り、同志社はまだましかもしれないと。ただ、それでは何人が馬力をあげて祈るかという問題になりますと、祈るのは少ない。あるいは祈っても本当にか細い声です。

同志社にとらわれない自由

秦　わたし一つ具体的なたとえ話をしてみたいと思うんですけれども。竹下さんが早稲田から総理大臣になられるかなられないかという騒ぎのあった頃に、早稲田の校友たちが、早稲田から総理大臣が出るのだったらと言って、党を超えて「竹下、竹下」という声がものすごく上がったときに、うちの息子なんかは非常にいやがったんですね。つまりそういう動きかたがいちばんいやだと。

それからさっきも話しましたように、わたしは家内も同志社なので、そしてこれはお世辞でも何でもなく、我々大昔から社会党びいきなので、例えば同志社から土井さんが総理大臣になられるというのなら、我が家は文句なしにそれに賛成するけれども、しかしもしも土井さんでなくて竹下さんであったとしたら、彼が同志社卒であろうと絶対賛成しないと。つまり言ってみれば、そういうふうな、同志社だから、同志社の卒業生だからどうこうするというような発想が、わたし自身は非常にいやなんです。つまりそういうふうな母校へのこだわり方はいやだと。だからもしも、例えば政治的な信条のようなもの、あるいは歴史観や価値観がわたしと土井さんと違うのならば、いかに土井さんが私の先輩であっても絶対に容赦はしないと。そういうふうな考え方が同志社の学生の中にしっかり根づいておればいいと。一時の雰囲気に浮かれて、あ、土井さんが見えたと。そうするとみ

んなワーッと寄って、そこでその場だけワーッと校歌を歌うとか何とかで、それが単に儀礼的なものとしてはそれでもいいと思うけれど、そうなるだけでは、わたしは一向感激もしない、評価もしない。むしろ一人一人の自分の考えでもって同志社離れの利いた自由を心に培う。これが私は新島先生本来の本当のお考えだと思うんです。同志社にとらわれるなということ、もっと自分自身の良心にとらわれなさいということだと思うんですね。だから学校の卒業生だからどうこうとか、同志社だからどうこうとかとことごとに出てくると、わたしはそれは非常にむずがゆくて、好きになれないんですね。

私学は批評の精神をもつべし

土井　それはどうぞご安心下さい。各地にわたし行きまして、同志社の校友会が、今日は折角土井が来るからというんでみんな集まってますとおっしゃいますけども、それはみんなにはならないです。

それと今の竹下さんの例も、竹下さんを大隈講堂に迎えようというときに、竹下さん来るなと。わたしたちは出席しないという運動が一方で起こりました。そのために出された手紙をわたしも見て知っております。それで校友会に呼びかけられたんだけど、校友会もそれに対しては全面賛成という形でなかったばかりでなく、現在の学生の中には、はっきり拒否して、非協力という学生があったという……。

秦　学生にはとても多かったんです。その場合学生が問題にするのは、むしろ大人、卒業生なんです。早稲田の卒業生は、早稲田から総理大臣が出るぞという、もうそれで浮き足立っちゃう。早稲田大学の現在学生としてはもうそれはかなわないと。と同じような、この、かなわないという気持ち、これが一つの批評の気持ちだと思うんですね。私学というのは権威ではなくて、批評の精神を持たなければいけない。批評の精神が持てなければ、私学の持ってる私学的感性というのは育たないと思います。それが自由のいちばん基本だと思うんです。そこへ同志社ならばキリスト教精神がどううまく重なるかという問題でしょうね。

北垣　キリスト教の重要視することの一つは愛ですし、それと同時に預言者的な精神というものがあるわけですから、それは徹底した批評精神だと私は理解してます。そういう意味で、わたしは今の秦さんのおっしゃったことは正しいというふうに思いますし……。

秦　今正しいということをおっしゃったんですが「正しい」ということにも、すぐ我々は惑わされるんですね。例えば今我々はここにこうやっていすに座っていますけれども、日本人の座り方は正座だということになってるんですね。しかしあんなものはつい近世から正座になったのであって、しかも誰が正しいと決めたかというと、どうしても上のほうの人が下のほうに対してですよね。十七世紀の中頃より以前に日本人で正座した人は罪人だけですから……。公家も武士も神仏像にも正座例は稀有なんです。そして現在でも正座は学校では体罰の一つの方法になっている。しかも現実に日本人はだんだん正座しなくなっている。むしろ「正しい」という言葉が出たときには、いったい誰のために正しいのか、誰の都合で正しいのかということを考える能力が必要だ。そういうふうな批評能力が学生にあれば、一人一人にできてくれば、感性も、それから態度も、判断力も養われてく

る。隣の人がこう考えるから、こう考えるとか、みんながそう言ってるからそうするとかという、それを離れて超えることが、同志社精神だと私は思ってきたんですよね。

新島精神の再定義を

太田　同志社の生徒の数、大学生の数というのは割合少ない学校でしょう。

北垣　それでも大学生は一万八千ほど……。

太田　一万八千ぐらいの大学というのは割合多いですか。少ないでしょう。東京だと立教ぐらいでしょう、卒業生も少ない。

北垣　立教は同志社よりも少ないです。

太田　やっぱりマンモス大学にならないと。商売からいうともっと生徒を増やしてということがあるんでしょうけど。

北垣　今の規模を特別に大きくするということはないようです。

太田　この間うちの会社で話していただいた東京大学の先生で衛藤先生という方が亜細亜大学の学長になられましたね。テレビで亜細亜大学のピー・アールをしておられるわけですよ。将来を考えてみると、学生が減ってくるということを今から考えとかないといかんわけですね。そういう中で常にある一定量をキチッと確保しながらやっていくという一つの学校のよさというのも、そこでまたもう一遍見直されてくるのとちがうのかなと思うんですよね。だんだん二十一世紀になったら学校が余ってくる時代になってくるわけでしょう。そういう点で、やっぱり学校のよさというのをどういう具合に訴えていくかというのは、学生ももちろんだし、世間に対するあり方も大事じゃないかなあと思いますね。

北垣　そういうわけで新島襄の精神を定義し、再定義し、二十一世紀の観点からもう一遍定義するとどうなるかというようなことを同志社はこれから深刻にやっていく必要があると思います。

もうそろそろ時間も来ましたので、この辺で終わりにさせていただきます。今日は本当にお忙しいところを先生方、ありがとうございました。

（一九八八年十二月七日収録、於ホテル・オークラ）

土井たか子　一九五一（昭和二十六）年大学法学部法律学科卒業
一九五七（昭和三十二）年大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程修了

秦　恒平　一九五八（昭和三十三）年大学文学部文化学科卒業

太田　文雄　一九四三（昭和十八）年旧制中学校卒業
一九四六（昭和二十一）年経済専門学校卒業

≪座談会≫　その２

これからの私学と同志社

――卒業生の目に映った同志社――

――出席者――（ABC 順）

黒　岩　重　吾（作家）

大　多　一　雄（大阪市役所助役）

湯　浅　叡　子（財団法人千里文化財団専務理事）

――司　会――

岡　　満　男（大学文学部教授）

岡　きょうはたいへんお忙しいところを母校の同志社のためにご出席いただきまして、まことにありがとうございます。

一八七五年十一月、校祖新島襄が京都で同志社英学校を開校してから、同志社はことしで百十四年の歴史を受けついできたことになります。世界の大学の歴史からみれば、百十四年はさほど古いことになりませんが、日本にかぎっていえば、屈指の歴史といってさしつかえないと存じます。また同志社もその中に組込まれてきたわけですが、戦後の新制大学がスタートを切ってからちょうど四十年が過ぎたことになります。歴史が古いということには伝統とよばれる特徴が鮮明に息づく半面、ときに積年の垢のようなものの存在を問い返す必要も大いにあるように思われます。同時に、新制大学の問題として大学教育というものの大衆化をめぐる功罪についても、今日の時点で考えてみたい問題でございます。さらに、あと数年もすると、子どもの数の減った影響が大学への進学状況にもろに波及するものとみられております。

以上のような問題をはらんだ状況のなかで、これからの私学、とくに同志社はいかに

湯浅　叡子女史

あるべきか、きょうはご卒業以来ながいあいだ外から母校をながめてこられたみなさんの率直なご意見をお聞かせいただければと存ずるしだいでございます。

話のいとぐちとして、まず同志社の学生のころの思い出からお聞かせいただけないでしょうか。黒岩さんの場合は、学生生活が戦争中から戦後にかけてでございますね。

暗い時代の暗い思い出

黒岩　ぼくは昭和十六年に予科に入ったんですけれども、旧制高校が嫌いだったんです。なぜ嫌いかということは随筆にも書いているんですが、あの白線の弊衣破帽、つまり織田作がいう逆説的な美意識、ああいうエリート意識をしめすスタイルがすごく嫌いでね。

それでぼくが入学した当時、そろそろ学生に対する圧迫が非常に強くなって、髪の毛を切らされたり、学生がダンスホールに入るのを禁止されたり、ちょうど世界大戦に日本が参戦する年の四月ですから、学生生活にもかなり軍部による圧迫が強くなりました。

ぼくは慶応と同志社を受験したんです。慶応のほうは一次だけ通って二次で落ちたんですけれども、なぜ私学だけを受けたかというと、少なくとも私学にはまだ自由な伝統というものが残っているのではないかというふうに錯覚したんですね。ところが入学してみていちばん驚いたのは、私学が軍部に弱かったことですよ。すごく弱かった。むしろ旧制高校のほうが軍部の圧力にたいして最後まで闘ったようですね。教師連中でもそうです。入った翌年だったか、英語の教授が突然神道論などをやりはじめてね。神ながらの道などといわれて愕然としました。なぜ私学があいう国家体制に弱かったかということはいろいろ理由が考えられると思うんだけれども、やはり根本は学生と教授の意識の問題だと思いますよ。あの当時の学生が反骨精神がなかったということ、それとものを考える力がなかったということに帰するように思います。

ものを考えるということはぼくはいちばんだいじだと考えていたし、いまでも通用することでしょう。ものを考えるというのは、人生をどう生きるかという人生論ですよ。その人生論を考え、語ることがあの当時の同志社の学生にはほとんどなかったということです。教授も講義のなかで人生論みたいなことに全然ふれてくれない。だから旧制高校を卒業した連中と話していてうらやましいなと思うのは、戦時中でも人生論を語ることが行われていたということです。哲学とか、あるいはそういうふうなものを主体とした人生論が同志社にはなかったですね。

いま、ぼく自身は非常に勝手な生活をしてますから、教育を論ずることはまったくだめなんですよ。しかし、そういう人間の意見もいいだろうと思って来たんですけれども、人生論ないしそういうものがなかったというのがあの当時の同志社の学生生活でした。

岡　人生を論ずることがなかったとおっしゃるけれども、私もおなじ世代なんですが、私どもの世代にはあの戦争という大きな流れ

のなかで宿命論者になってしまい、人間を深く見つめるということを拒絶するようなところもあったように思うんですけれどもね、大きな波にもまれてしまってね。

黒岩　前に芥川・直木賞展が開催されたおりに、あの当時つけていた日記を持っているのでそれを出したんです。その内容はやはり戦争に対する憤りというもの、思想的なものではなく感情的な意味においてですが、自由をなぜこんなに束縛されなければいかんのかという憤りを書き連ねたものばかりです。

なぜ同志社の生活に旧制高校のような反骨精神がなかったのかというと、あの当時の同志社は旧制高校を落ちた連中が多かったせいですよ。ある意味で非常に劣等感を持っていると同時に、落ちた連中が行っているから、かえって上に対して柔順だというところもあったんですね。反逆しないで、勉強さえできたらいいという気持ちが非常に強かったんじゃないかと思います。……こんなむつかしい話をするつもりはなかったんだけれども（笑）、とにかくぼくは暗かったですね。

黒岩　重吾氏

岡　そうすると、戦争中の学生生活にあまり明るい思い出というものはございませんか。

黒岩　いや明るい思い出もあることはありますよ。むちゃくちゃなことをして配属将校によく殴られた思い出もあるけれども、明るい思い出としては、ぼくはやはり女性とよく遊んだということですね。同志社女専が隣にあったでしょう。大阪から電車で通っていたので、途中の駅で降りてよく山へ遊びに行ったりしましたからね。そういう思い出もありますけれども、あとはないですね。

青春に悔いない解放感

湯浅　私も教育論を話すんだったらまったく資格のない人間ですよ。

岡　いや、型にはまった教育論をやるのが、この座談会の目的ではありません。

湯浅　そうですか。私は戦後すぐの学生生活なんです。いわゆるアプレゲールのはしり――懐かしい言葉ですけれどもね。私の同志社大学の思い出といったらほんとうに楽しい思い出ばかりです。あのころはやったのに「わが青春に悔いなし」という言葉がありましたでしょう。まさに私は大学生活イコールわが青春に悔いなしなんですよね。そういう意味ではいまだによく学生時代の話をして、「楽しかった！」と言うと、梅棹忠夫先生（注・国立民族博物館長）あたりが「あんたはよっぽど楽しかったんやな」と言われるくらいですが、それは長かった戦争が終わった解放感というものもありましたし、いままでの価値観とか倫理観とか、縛られていたものが全部ガラガラ崩壊しちゃいましたでしょう。われわれよりちょっと年上の人は呆然自失になっちゃったわけですね。ですから、ちょうど子どもから大人への過渡期にあった私たちは戦争中のスパルタ教育を受けていたものですから、体力はあるし、知力もわりにある。そのうえ従来の古い価値観から解放されたわけでしょう。なにしろ自由だというわけで徹底的に遊びました。

大多　一雄氏

ですから、「学校へ何しに行ってんの」といわれたら、「遊びに行ってる」と堂々と私は答えていたんですよね。

実は私は旧制の最後なんです。英文学科ではまだ一クラスの人数が少なくて、亡くなられた上野直蔵先生が主任教授だったんです。全部で三十何人のクラスですから目がよく行き届きましたわね。女子学生は少なくて六人ぐらいしかいませんでした。それで私は春と秋はテニスで忙しいし、夏は水泳とヨット、冬はスキーというわけですよね。その合い間合い間にNHKに歌をうたいにも行ってましたから、ほんとのところ勉強する暇などなかったんです。季節のいいときはテニスをしなければならない。白い球が見えなくなるまでがんばってやるわけです。もちろん授業なんか出ませんでしたね。あるとき授業を終わってむこうから上野先生がお通りになる。さあ隠れようと思うのですが、テニスコートの真ん中に立ってるものだから隠れられないのです。それで下を向いていると、「ちょっと、ちょっと湯浅さん、授業終わったよ」って怒らずにおっしゃいました。そうすると、私のほうはよけい恐縮するわけなんですが、それほど、のびのびとね、授業さぼってテニスをしていました。上野先生は私をにらんではいらしたと思いますが、それなりに目をかけてくださるという、そういう非常に個人的な楽しさがございましたね。卒論書くとか何とかになると、いの一番に助けてもらいに行くのが上野先生のところでした。「ふだん遊んでいるからだ」なんていうことを先生もおっしゃらないわけですよ。人生楽しんだらいいということを思っていてくださったものですから、私の学生時代の思い出は徹底的に明るくて楽しいものでございますね（笑）。

岡　いまの湯浅さんにはそれがかえっていろんな意味でプラスになっているわけでしょう。

湯浅　私はいま国立の研究機関に付属する公益法人で仕事をしているので、いわば学者に囲まれているわけです。そういう方たちが、旧制高校時代に魂を揺さぶられるような青春の悩みを経験し、人生についてとことん論じ合ったという話を聞くと、私はこれは女だから経験できなかったのかと思っていたのですが……。黒岩先生のおっしゃるように、旧制高校のようなつき詰めた人生論の経験がないのはたしかにさびしいと思いますけれども、「美感遊創」というキャッチフレーズがありますね。その美感遊創という時代になると、遊ぶのも徹底的に遊んだ人間というのは、遊びからいろんな友達の関係ができますし、それなりに世の中も見られますしね。そういう意味では今の世の中といいますか、これからの世の中にやはり遊びの要素というものを、しかも徹底してやったということがある意味をもつかもしれませんね。

魅力的なキャンパス環境

岡　なるほど。大多さんはいかがでしょうか。ご卒業は昭和二十七年でございましたね。

大多　私は二十二年に予科に入りまして、

一年間予科を終えたところで学制が変わり、新制大学となりました。教養を終わって経済学部へ行きまして、二十七年に卒業いたしました。

きょう、実はこの座談会に黒岩先生、湯浅さんがおみえになるというので両先生のお話をきょうは聞かせていただけるという気持ちで出てきたんですが、私の場合は旧制姫路中学の出身でございまして、そんなこと言ったら何ですが姫路中学はたいてい旧制の高等学校へ行く、まあ姫高には行けるだろうというような、そういう雰囲気がございました。そんな中で、実は同志社に先輩がおりまして、姫路へ帰ってきたときにいろいろ話を聞いていい学校やなと思いました。先輩からちょっと同志社を見にこないかというので、京都に行ってみました。

岡　満男氏

当時の同志社のキャンパスの雰囲気やすぐ前の京都御所など、姫路にはああいう所がございませんのですごい所やなと、まずびっくりしてしまいました。緑の木々のいっぱいあるなかに点々とチャペルをはじめうまく建物が配してある、まったくすばらしい学校やなと、感じ入ったことでございます。

それと、笑われると思いますが、やはり同志社へ行きますと、学生さんのピンととんがった角帽が格好いいなあと、まず思いましたね。ぼくも同志社へ入ってあんな角帽をかぶってみたいなと、きわめて単純ですけれども、そういうことでございました。それで、旧制高校を受けませんで、同志社の予科と専門部を受験、予科に合格して入学したわけでございます。

岡　同志社にかぎらず、角帽姿の学生を見かけなくなってひさしくなりますが、同志社の角帽はたしかに他の大学にくらべて特色のある形でしたね。

大多　戦争中の思い出としては中学生で勤労動員にもまいりましたが、だいたい姫路というところは兵隊さんの教育のきついところでございました。だから、戦争が終ったときにはほんとうにほっといたしました。

実は昭和二十年のことですが、姫路中学でもみな海軍兵学校などをめざすような雰囲気が生徒の間にございました。私は病気のため海軍兵学校を受験できませんでしたが、陸軍の航空士官学校を受けて合格したんです。そして、八月二十五日に入校すべしという通知が陸軍教育総監部というところから届き、勤労動員を解除されて待機しておりましたら、入校の十日前の八月十五日、終戦ということになりました。やがて進駐軍が姫路の町にもやってまいりましたし、町は空襲で焼けてしまっていて、なかなか落ち着かない環境でしたね。そんな中でこれからどうするか考えたわけですが、ようやく落ち着きを取り戻した段階で、みんなが高校や大学への進学を考えるようになり、さきほど申し上げたように、私は先輩の感化を受けて京都へ行って同志社のキャンパスを実際に見て、ほんとうにすばらしい学校だ、どうしても受けたい、通りたいということで受験したしだいでございます。

学生生活のなかでは、まだ戦後で物もすく

のうございましたが、やんちゃでございましたから、よう銀閣のほうへ買いに行ってどぶろくを飲みましたり、今出川の角っこに今でもあると思いますが、「上海」というめし屋がありまして、そこでどぶろくを飲んだりして勉強もあまりしなかったのでございます。しかし小人数のクラスの中で非常に先生と人間的な関係ができたんじゃないか、友達との関係もできたんじゃないかと思います。

そういうことで二十七年にいちおう卒業して、さる民間会社に就職試験は通ったんですが、ちょっと勤務地が遠かったものですから、両親も、私が長男のためそんな遠い所へ行くなということになりました。そこで、学生時代にあまり勉強しておりませんでしたので、もうちょっと勉強させてくれますかと両親にたのんで、大学院へ残りましてまさに大学時代に勉強しなかったことをまじめにちょっとやったんです。そのうちに、べつに教授になれる能力もないし、ちょうど地方にも人事委員会ができて、昭和二十九年春採用ということで第一回の採用試験が行なわれることになりましたので、友達と京都府、京都市、大阪府、大阪市の願書をもらってきたわけです。両親もそのとき姫路から大阪へ出ておりましたので、まあ大阪にしようと、きわめて単純な、青雲の志も何もなく府庁と市役所を受けました。両方とも合格通知がまいりましたので、どうしようかなと思っていろいろ知り合いに聞きましたら「あんたみたいなやんちゃは大阪府へ入ったら能勢の山奥か泉南へほうり出されるかわからんけども、大阪市へ入ったら市内に置いといてくれまっせ」というようなことなので二十九年に大阪市役所に就職したわけでございます。

演壇で感じる仲間意識

岡　当時の官公庁には同志社出身はすくなかったでしょうね。

大多　いまでこそ京都市の奥野助役も同志社出身なんですが、たしかに同志社の卒業生はすくなかった。しかも、昭和二十九年ごろはきわめて不景気な時代でございまして、一般企業は新卒でなければ試験も受けさせてくれないんです。だから、市役所に入ったはじめのころはそのうちに景気でも変わればまたどこか一般企業を受けようという気持ちでおりました。ところが、配属された所が非常に楽しい所でございまして、そのうち、そのうちと思っているうちに三十何年市役所勤めになってしまいました。(笑)

岡　いまお話をうかがってますと、当時の同志社には小さなクラスの授業が多かったようにもとれるのですが、経済学部などでは学生数はどのぐらいでございました？

大多　四百人ぐらいではなかったでしょうか。

岡　現在はそのころの倍ぐらいになっていますね。黒岩さんがお入りになったころの予科の学生の数は。

黒岩　予科は一部と二部とあったんです。一部というのは三年制で二部は二年制ですが、一部が五十人ずつで二クラス、二部がやはり五十人ずつで三クラスか四クラスありました。だから両者合わせて二百五十人か三百人ぐらいだったはずです。

岡　そうしますと、教師との間もそうでしょうけれども、学生同士の間も、わりかた人間的な交流ができたんじゃないでしょうか。

黒岩　だから、ぼくはだめなんですよ。なぜだめかというと文学書ばかり読んでいたでしょう。文学書ばかり読んでいたのでは、同

志社の学生に仲間がいなかったということです。

湯浅　学部はどちらへいらしたんですか。

黒岩　戦争中のことで英文科はだめだというので法学部と経済学部がいっしょになって法経学部といっていたけれども、そっちのほうへ行きましたけどね。「難病の会」というのがありまして、そこに学生時代つき合っていた男がいるんです。昔、いっしょに遊びに行った思い出しかないんだけれども、彼とはときどき人生論など話した、やはり他校の学生とのつき合いがわりあい多かったですね。それもぼくは大阪から電車通学していたので、比較的しゃべったりしたのは藤沢薬品の常務になった小菅君、彼とは親しかったけど、同志社の中で友達というのはあまりなかったですね。

岡　今は当時と違いまして、同志社の規模が大きくなり、学生二万人という数になっておりますね。この点はどうでございましょう。みなさんが学生生活を送っておられた時代とはまったくけた違いでございますね。戦後の日本は年々学歴社会の色を濃くしてきておりますが、その学歴の核ともいうべき大学じたいはどこともだんだん大所帯になっていっております。とくに私学の場合、経営の問題ともかかわって、この傾向がいちだんと強くあらわれているように思われます。学校によっては教室などまるで満員電車のなかで過ごすようなところもめずらしくありません。このようないまの学生生活をごらんになってのご感想をお聞きしたいんですけど。

湯浅　あまりに年代が離れすぎていて学生そのものがわからないんです。同志社についてもまことに申しわけないいいかたかとも思いますが、私どものころはほんとに入りやすくて、そんなに一生懸命にならなくても英文科へ入れたでしょう。入ったらまた楽しく遊べたでしょう。二、三年前の話なんですが、知り合いの家の坊ちゃんが同志社にお入りになったと聞いて、そのお母様に「よかったわね、あそこ入るのも楽だし、入っても遊べるし」と私がいったら、そのお母様が眉をキリキリッとして、「何おっしゃってるんです、今は入るの大変なんですッ」ってえらい怒られたことがあるんですが、それほど私の感覚と今の同志社とは違うので、語る資格はないと思うんですよ、私(笑)。

私なんかほんとに楽に入れて、入ってもすぐ先生と仲よくなって、お友達とも仲よくなれましたからね。なにか今はマイクロフォンを使って、ラウドスピーカーで講義するなんていうけれども、でも私らのころでも法学部とか経済はそんなことしていらしたようですが、英文科はそんなことありませんでしたね。

岡　黒岩さんはときどき同志社に来て講演されていますね。

黒岩　ええ、講演には五、六回行っておりますよ。

岡　そういう講演で学生たちに触れて、何かお感じになるものがございますか。

黒岩　同志社のある意味のよさというのが演壇に立ったらわかるのですよ。というのは、学生がはじめから演壇の私に対して仲間意識を持ってましてね。これは以前によその大学に頼まれて行ったときと全然違って、演壇に立ったら仲間意識が感じでわかるんです。ふつう笑わない言葉で笑ったり、だからずいぶん勝手なことが言えるし、そのよさというのはありますね。ぼくはそういったよさが昔なぜわからなかったのかなという一種の

悔いみたいなものがありますよ、過去を振り返ってみてね。今はよくわかりますよ。あるおおらかさというか、それはあります。それから、ぼくは非常に暗い青春だったといったけれども、戦後はまた違うんです。ところで、湯浅さんは資産家のお嬢さんですか。

湯浅　いいえ、そんなことありません。

黒岩　あの時代にヨットで遊んだといったからびっくりしたんだけれども、ぼくはそのころ、金がなかったので闇の商売をしたんですよ。学徒兵崩れの連中ばかりでね。MPに追いかけられて捕まると沖縄の基地の建設に連れて行かれるというので、ほんとに命がけでしたよ。

湯浅　危ないですね。

黒岩　危ないです、危ないです。しかし、まったく学校を離れて闇の商売で一生懸命生きていたときは楽しかったですね。それで、これはどうも捕まりそうでヤバイと思ってやめて大学へ行ったら、二年に進学しているんですよ。そんなぐあいでしたから、予科の時代は非常に暗かったけれども、学部時代のほうはまだましだった。要するに軍部のあの悪政がいちばん嫌いだったですからね。

一つ、いい思い出というのは、その当時、田村徳治先生がおられたんですよ。ぼくは田村先生のゼミに出て、初めてなんですけれども、卒論で九十九点もらったんです。

それはどういうテーマかというと、現在の憲法は革命であるか、それとも法律に沿ったものであるかという論文なんですよ。ぼくはべつに法律を勉強していなかったけれども、ぼくが書いた卒論で九十九点もらったのでいまでも覚えているんですね。

大多　すごいですね。

黒岩　ポツダム宣言を受諾した時点において日本は完全にその下に入って規制されるので、あの憲法というのは革命でもなければ何でもない、実に合法的なものだという論を書いたんです。そしたら九十九点くれました(笑)。そういう意味で田村先生の思い出というのはありますね。

岡　黒岩さんは、私と同様やはり学徒出陣をされた年代ですね。

黒岩　そうです。

岡　わりかた早く復員してこられたのですか。

黒岩　旧満州国にいてソ連軍が入ったときに退却したんです。

岡　そうですか、シベリアには行かずに。

黒岩　行かずにです。行ってたらぼくの体では死んでますよね。よく帰れたと思います。

岡　いまとちがって戦後の混乱の時期の学生生活というのは、ある意味で非常におもしろかったでしょうね。おそらく学生の身分でありながら、可能性がいろいろあったわけですからね。

黒岩　そんな私の生活とくらべて、湯浅さんの話を聞いてびっくりしました。ヨットなんてね(笑)。ぼくは海が好きで、いまクルーザーに乗っているんですが。

湯浅　クルーザーとちがいますよ、私の遊んだヨットはもっと小さいです。びわ湖へ乗りに行くんですもの。戦前からありましたからね。

黒岩　なるほど、びわ湖でね。すばらしい青春でしたね。

湯浅　おかげさまで(笑)。

画一的入試方法は問題

岡　みなさんのお話をうかがっております

と、学生生活を送られた戦争中から戦後まもなくにかけては現在では想像すらできないほど物の乏しかった時代ですね。そんななかで、それぞれこせこせしない、のびやかな学生生活を送っておられる。逆に現在は万事にゆたかな環境にもかかわらず、学生たちの前にのびやかさといいますか、おおらかさといいますか、そういうものを生活姿勢からかき消さざるをえない時勢が立ちはだかっているように思われます。はやい話が受験戦争なんていうことがよくいわれますね。かなりはやい時期から準備をこころがけなければ同志社はおろか、どこにも簡単には入れないわけですよ。このような現状は教育にとって大きな問題をはらんでいるように思いますが、黒岩さんからごらんになって、そういう受験に傷めつけられる若い人たちの問題をどのようにお考えでしょうか。

黒岩　受験ということ、そのことじたいはどうにもしようがないと思います。これは一つの人生競争でしょう。たとえば作家になろうと思っても、新人賞の募集にはざっと千人の応募があります。まずそれをのりこえなければならないのですから激烈な闘いですよね。大学受験もおなじことがいえますね。だから、競争はしかたがないと思いますよ。

問題はどこの大学も画一的に見える入学試験方法を実施していること、これこそ問題です。いまだったら、ぼくはどこの大学にも入れませんよ、まったくだめだと思います。現在の入学試験方法ではAなりBなりなにか一つ不得意があれば、だめなんですね。ぼくはそんな試験は受けたくありません。人間というものはAという部分が欠落していても、Bという部分で非常にすぐれているということがあるでしょう。一人の人間を総合的に考えて最低条件、つまり法律違反など反社会的な行動をしないというベースが考えられます。この最低条件を備えておれば、AなりBなりなにか一つの部分で突出していたら合格させなければいかんと思いますよ。

このごろ出てくる作家のなかにも、大学中退が多いんですよ。直木賞なんか取っている人にも多い。そういう人はいったん大学に入っても、大学の生活に失望しているんですよ。だから、自分の行きたい道へ行くというので惜しげもなく大学の生活を捨てているのでしょう。そういう連中はりっぱだと思いますよ。もっとも作家になるのだからそれでいいんで、一般の会社へ入るとなると、中退したらだめですね。

岡　いま黒岩さんのおっしゃるように、なにもかもが平均的にできないと入れないという入学試験方法にはおおいに問題あり、ですね。そういう方法じゃなくて、なにか一つすぐれた点があれば、それで全体を補うことができるというような方法がもっと考えられていいということになりますわね。そのことと関連して私学としての特色をうち出すこともできるのではないかと思うのですけれども、いかがでしょうか。

湯浅　推薦入学というのはそういうことをめざすものじゃないですか。官公立の大学ではやりにくいので、私立でおおいに推薦制度を生かしては……。

岡　このごろは地方の国立大学などにも推薦入学を実施しているところがふえております。推薦入学本来のねらいはなにか一つすぐれた点をもっている学生を選ぶことにあるはずですが、どこともねらいどうりに十分生かされているとは必ずしもいえないようですね。

湯浅　スポーツ推薦ぐらいですか、まずねらいどおりなのは？

岡　そのようですね。ところで、湯浅さん、私学教育というのはどうでしょうか、あなたは周りを国立出身の人に取り巻かれておられるわけですが……。

湯浅　いま私の周囲は国立大学出身で、しかも学者をめざしている人ばかりでしょう。やはり、基礎学問がしっかりしてますねえ。いま民族学をやってる人でも、数学に強いわ、物理に強いわ、化学に強いわ、それでまた哲学を語らせればショーペンハウエルがどうとかといったぐあいに、基礎学問というものが広く身についているということですね。

岡　なるほど。

湯浅　さっき黒岩先生はものを考える力とおっしゃいましたけれども、ものを考える力というものはどこからどうやってつくられるかということを、私学はもっと研究していただきたいのです。知識の集積をはかったらものを考える力ができるのか、いや、知識じゃなくて、ものを見る目がどうやって養われるのかということですね。

たとえば、私のお友達が小さいシンクタンクの会社を経営しているのですが、その社長じしんは京大出身なんですが、彼がいうには、国立大学を出てきた調査研究員よりも、私学を非常にいい成績で出てきた者のほうがシンクタンクとしてずっと役に立つというのですね。なぜかというと、そのアプローチのしかたが非常に自由な発想から出発する。官学を出てきた人は、こういう命題があると、あ、それはこうなんだという何か明快な道筋がついちゃっているんですって。そうするとシンクタンクとしては全然仕事にならない。むしろ、とてつもないアプローチを考えるのは私学出身の非常に優秀な人だという話を聞いたことがありますがね。シンクタンクなんて、ある意味では最も時代の要請を反映しているわけですからね。

岡　大多さん、公務員の世界はあいかわらず国立を出た人が多いですね。だけど市民と触れ合う行政ということになってまいりますと、どうでしょうね。

大多　さっき黒岩先生がいわれたように、完璧な人間はいないわけですから、いまの入学試験制度が何でもかんでもある程度できなければいかんというのはたしかに問題だと思いますよ。それから推薦制度の問題も出てきましたけれども、私は数学なんて嫌いでしたが、それをやはり勉強させられなければならないわけですね。それもある程度まで点を取らなければ、どんなにすぐれたところをがんばってもだめだという状態ですわね。そうしたことから、自分がいちばん得意としていることを伸ばすことのできるような教育も必要とちがうかなと考えます。経験的にいっても、おなじような人間ばかりこしらえてみたっておもしろみがないですよ。

役所の場合を申し上げますと、おっしゃるように公務員というのはだいたい国立出身が多いです。私が入ったとき聞いて、憤慨しましたのは、以前はおなじ試験を通って入っても、官立と私立出身では初任給が違ったというんですよ。そんなばかなことありますか、おなじ試験で通ってきたらおなじじゃないですか、といっても、やはり官立出身のほうが多かったですね。

われわれのような第一回の公開試験のときには私学出身が非常にすくなかったんですが、最近はかなり、同志社にかぎらず私学出身もだいぶふえてきました。私も大卒の二次

試験の面接をいつもやらされるんですが、官立大学出身がたくさんおりますけれども、なにかみんなおなじような似たような印象を受けるわけですね。ところが東京であれば早稲田、慶応とか、関西であれば同志社とか関学とかの出身者もずいぶん入ってくるようになりましたが、なにかちょっと、それぞれ個性を持っていておもしろいなという印象を受けます。だから人事委員さんも私もとくにそういう点を見て質問をいつもするんですよ。そうすると非常に人間的におもしろい人物を発見することができる。そういう人は役所へ入りましてから四、五年見てますと、たしかに自由にやらせれば自分の特色を生かしてよく仕事をしてくれるんですね。だから、平均点をとれば官立大学を出られた人のほうが全然落ちこぼれなくちゃんと仕事をされるということだけれども、思い切ったことをするのはかえって私学出のほうだと私の経験では思います。私じしんさきほど申し上げましたように大阪市役所に長く勤めようとは思わぬまま、ついずっと勤めてしまいました。助役になっていまちょうど五年目になりますが、事務屋としてはこれで終わりでございます。大阪市の長い歴史のなかで私学出の助役は、二代前の中馬さんが早稲田を出て助役になられたぐらいで、他はみな官立の出身者です。たまたま私みたいな者でもこうして短期間でも助役をしておりますと、あとに入ってくる私学出身の職員が、おれも一生懸命がんばろう、そしたら部長でも局長でもなれるのではないかと、少しでも励みになったらいいなと、こういうふうに思っておるんですけどね。

　このごろはかなり私学出身者も入ってまいりますし、なかにおもしろい人物がおりますよ。

黒岩　いまぼくの受験時代を思い出したんだけれども、ぼくが慶応を落ちたのは数学の試験があったからですよ。同志社の入学試験には数学がなかったんです。英語と国語だったか非常に入試科目がすくなかったんです。それですこし勉強したらできそうな感じだった。だいたい数学というのは作家には要らないものですよ。だから数学があったらぼくは入っていないです。完全に落ちてますよね。そういう点でも入学試験を全部画一にしないで、もっとちがった方法をなにかとり入れた

らいいと思うんですがね。そういうことを同志社が考えたら、よその学校だってまねてくるだろうし、いいことだと思いますよ。

岡　入学試験の科目という点になりますと、国立の場合とちがって私学は一般的にかなり数がすくなくてよいはずです。いまでも同志社は文科系ならば数学を受けずに入学試験を受けられるわけです。

生かしたい校祖の精神

岡　いろいろご意見をうかがってまいりましたけれども、もう一つ、将来に向かって同志社はどうあるべきか、ご意見をお聞かせいただきたいと存じます。同志社の今出川キャンパスの正門を入りますと、「良心の全身に充満したる丈夫……」という校祖のことばを刻んだ良心碑がございますね。この碑のこと、黒岩さんは覚えておられるでしょうか。

黒岩　いや、ぼくは覚えていないですね。

岡　今日の日本にとって「良心の全身に充満したる」ということはいちばんたいせつなこととして強調する必要があるように思われますね。また一人、一人の人間にとって、「良心」とはなにかということを教育の場を通じて積極的に具体的に追求していくところに、同志社教育のあるべき特色を発現することもできるのではないかと考えるのですが……。

たしかに国公立にくらべたら私学の場合は特色を発揮しやすいはずですよね。とりわけ今日のように学歴社会の進行するなかでは、私学は教育を通じて特色がおおいに発揮されてこそ存在の意味も大きいといってよいと思いますね。この点、同志社の場合は百十三年という長い伝統があるわけでして、私学のなかでも同志社はこれからどうあるべきか、ということを考えてまいりたいと思います。

黒岩　それはなかなかむつかしい質問ですね。ただ、ぼくにはわりあい若い人たちの知り合いがいるんです。もの書きですからつき合い範囲が非常に広いんですけれども、その中で同志社でいまいちばん足りないものというと、だいたい平均して返ってくるのが、まず新島襄という人の基本精神から考えても、他の大学に比べてボランティア活動がいささかすくないということなんですね。それと、これは他の大学を出た若い人の意見ですが、同志社の内部でシンポジウムが開かれることがすくないというんですね。

それから、いま田辺へ移って、あそこはどうなっているのですか。

岡　基本的には田辺キャンパスで一回生と二回生、三回生と四回生が今出川キャンパスという形になっております。

黒岩　ぼくなんかは、あのれんがづくりの学舎に対するあこがれというか、あれが非常に強いですね。今出川キャンパスのあの風景、あのなかで勉学してみたいという思いがあった。だからいまでもあのキャンパスは同志社を考える場合のいちばんの基本点じゃないですか。あそこはあまり軽く見ないでほしいという気がしますね。

湯浅　私は旧制の女子専門学校（注・現在の同志社女子大学）から共学の大学へ行ったわけですが、その前に私は京都府立女学校から同志社女専へ入りました。そのときの第一印象は、なんとだらしのない人たちだろうということだったんです。といいますのは、府立の女学校というのは非常に礼儀作法にやかましくて、三歩下がって師の影を踏まず式で、先生に対しての会釈のしかたや廊下を歩くときには端っこを歩くこと、またお客さまと廊下であったら目礼するようにとか、それ

から上級生に対しての礼儀作法もきちっと守られていた学校だったんですよね。同志社女専へ来ましたら、先生つかまえて、「なあ、先生」といってポーンと肩たたいたりしているわけよね。「あら、なんてけじめのない人たちだろう」と、実はそのとき私はびっくりしました。あまりにも対照的でしたんでね。

その印象が非常に強かったものですから、大学へ来まして男子学生といっしょに勉強するようになっても何となくそのけじめがないように思えたですね。もうすこし緊張するべきときにはきちっと緊張する、そして自分を解放するときには徹底して解放するところがあってもいいのではないか。そんな感じがしましたね。半面、たしかに同志社は非常にのびのびしているところがあって、この点はいいですね。あまり枠にはめられないということでしょうか。それと建学の精神が薄れてきているとはいっても、やはり自由とか、国際的とか、ことに女子教育については先鞭をつけたわけですから、そういうものが学生の深層心理にはあると思うのですね。だから、それをもっともっと教育の場でかき立てるように考えてほしいと思いますね。そのためには、建学の精神というものを先生方ももっと意識してもらわなきゃならないし、くり返しそういうことを口に出していうようなことをしていくべきですね。

これからの時代でしょう、私学の人たちがほんとうに役に立っていくのは。いままでは明治政府以来、官尊民卑ということも手伝って官立大学がリードしてきましたし、それが時代の要請でもあったわけです。しかし、これからは与えられた勉強だけは非常によくこなすけど、自分から積極的に考えたりする習慣がないという人ではあまり役に立たない仕事がいっぱいふえてくるわけですね。私はこれから同志社にかぎらず、自由なる私学の精神というものが社会で活躍する時代が来るのではないかと思いますよ。あまり偏差値のことなどいわないで、もう少し自由を楽しむということを先生たちもいっしょになって考えてほしいですね。私は先生たちのほうが型にはまっていらっしゃるんじゃないかなという気がするんですがね(笑)。

岡　それとどうでしょうか、学生二万人という数字は。

大多　これはやはり私学ですから、学校経営ということが一つございますね。こだわるようですけれども、私らのころの学生生活にはこぢんまりした授業、先生との深い触れ合いを感じたこととか、あるいは友達にしてもバラエティーに富んだいろいろな人間がいましたね。たとえば私の同級生には、田村高広という、阪東妻三郎さんの息子さん。

湯浅　私、いっしょにテニスしましたわよ。

大多　ああ、そうですか。それからきれいなおよめさんをもらわれた二谷英明、あれは隣のクラスでしたし、俳優ばかりでなく、変わった人間が自由にのびのびできるような雰囲気があったんですね。

ところが、いま二万人とおっしゃいましたが、このあいだ田辺のキャンパスへ私も行ってまいりました。実は数日前、関西学研都市の地域を斉藤経団連会長のお供をしてヘリコプターでずっと回ったんです。そのときに上空から同志社の田辺キャンパスを見て、あんなに早くあの位置に広い土地を確保されたことは賢明だったと思いますね。

いまのところは今出川と田辺とキャンパスが二つに分かれているのでいろいろ問題があ

るだろうと思います。しかし、いちはやくあの場所を確保されて、将来いろいろな機関や施設が出てくる所に一つの中心をこしらえられたというのは賢明だと思うのですが、同時に黒岩先生もおっしゃったように、やはり今出川キャンパスの同志社に対して強い郷愁を持っておりますよ。その点をこれからもだいじにしてもらいたいと思いますね。また経営的に私学ですから大変なんで、学生さんがこなければ経営がむつかしいことはわかるし、大学を受験する層が将来だんだんすくなくなってくると思うのですね。

岡　だから私学の場合、それぞれ魅力のある特色を発揮することが必要ということになりますね。

大多　そうなってきますと、これまでは入学試験がむつかしいので、ひたすら入りたいということで一生懸命試験勉強をやっていたのが、これからは入学試験を受ける人間の絶対数がすくなくなるわけですから大学をいろいろと選ぶことになりますね。そのときにはやはり、こういう特色のある大学へ行きたいという選択にこたえられる学校づくりをしてもらいたいですね。

同志社というのは、ぼくらもよういわれましたが、ぼんぼん学校で、悪いことをするやつはおらんけれども、のんきなところやなという感じのことをいわれましたね。それから百十三年の伝統ということにしろ、新島先生の良心という建学の精神にしろ、それにあぐらかいておってはならないと思います。ほかにも私学はいっぱいあるんですからね。やはり受験生たちが同志社のようなところへ行きたいなという感じの学校づくりをしてもらいたいなと思いますよ。だんだん生徒数が減ってきましたら、広いキャンパスもいろいろ使い方をお考えいただいて、ユニークなキャンパス生活が送れるようなことを考えておいてもらいませんと、単に学生さえ集められたらええわ、数が多かったらええわということでは、将来特色のない学校ということになりかねません。

私らはやはり母校として同志社がたいへん好きですし、また最近のように非常に評価をしていただいていることも聞きますし、いい学生も育ってきているのですから、将来とも特色をますます生かした大学であってほしいですね。

岡　その特色というのは、やはり伝統的なものをよりどころにすべきでしょうね。

大多　そうですね。黒岩先生や湯浅さんからいろいろお話が出ていますけれども、やはり同志社の雰囲気というのは自由な、のびのびやれるという、それは絶対必要だと思います。

岡　その点は、同志社だけではありませんが、日本の大学の環境からいまいちばん欠けつつあることなんですけれどもね。

大多　あの学園紛争が全国にひろがったときにたまたま京都へ行ったおりに今出川キャンパスで正門を閉めてしまって、あの良心の碑の所に、大きな立看板を立てているのを見て、私はもぎ取って捨ててやろうと思うぐらい腹が立ったことがあります。なにを考えているのか。そのぐらい今出川キャンパスには、私自身あこがれがありますので、黒岩先生のおことばにのるわけじゃないですが、だいじにしてもらいたいと思いますね。

湯浅　二万人とおっしゃいますが、私はいま大学を高等教育とあまり思わないほうがいいんじゃないかと思うんです。しいていうならば高等普通教育だと思うのですよ。だから

二万人でもいいんじゃないでしょうか。

個性的な人間を育てよ

岡　大学教育というものが大衆化したわけで、大衆化というのはある意味ではレベルダウンを避けがたいわけですわね。だけど、レベルダウンしたから無意味になったわけじゃないんで、むしろ日本人全体としては教育レベルがかなり上がっているわけです。その点から考えれば、大学というもの、教育というものをもっと長い目で見ないといけないし、大きな目で見ないといけないんでしょうね。

黒岩　いちばん同志社に欲しいのは、反骨精神をもったというか非常に個性的な人間が育つということですね。どうもみんな一つの円みたいななかに入ってしまっているように見えるんです。これは慶応もいっしょなんですよ。すこし見方を変えていえば中退者が非常にすくないんです。慶応も同志社もそうですが、早稲田は非常に中退者が多いんです。ぼくにはそれはすばらしいことに思えるんですね、それだけ中退者を出せるというのはね。つまり、個性的な人間がそれだけ集まっているということになるんですよ。人間というものは成長するにつれてそれまで考えていたのと違う道を見つけるということもあるんだから、そういうふうな違う道を見つけてどしどし出ていけというふうな個性を大切にする教育方針もぼくは同志社に必要だと思うのですよ。あくまで円のなかだけでいいというんだったら、あらためて教育論なんか必要ないと思います。飛び出したいやつは飛び出せ、自分で何か見つけろと、こういうふうなやり方が今日非常に必要なのではないでしょうか。

　ぼくは親しいからいうんじゃないですけれども、たとえば同志社に森浩一さんがいますね。森さんはいままでの考古学を革命しましたよ。なぜ革命したかというと、掘って研究するんじゃなしに、そこに文化というものを取り入れていますね。森さんがあれを取り入れたために、ある意味で現在までの考古学界は驚愕したと思うのです。建物を研究するのではなくて、非常に人間的な見方をするんですね。あの人は純粋の同志社の人ですね。ああいう個性的な人物を同志社もどしどし育ててほしいと思います。個性でものごとを改革して新しく拓いていく人生とかものの見方とかを実践する人物をもっと多く育ててほしいと思います。

湯浅　あの方、英文科出身なんですってね。知らなかったら、考古学で売り出されたところに上野先生が「あの人も英文科だよ。だけど学生時代から発掘にばかり行ってたよ」(笑)、英文学やらないで発掘ばかり行ったんですって。それを認めてね、その態度がいいわけですわね。

岡　おそらく国立大学だったら、なかなか周囲が認めてくれないでしょうね。

黒岩　そう、そうです。そこが同志社のよいところですよね。

岡　森浩一さんの前に酒詰仲男という先生がおられましたが、ご存じでしょうか。

黒岩　いや知りません。

岡　もう故人になられましたが、この方も英文科の出身です。本職は旧制中学の英語の教師でしたが、発掘現場にさかんに行かれていたわけで、やがて教師をやめて大山巌の令息、大山柏が主宰する大山考古研究所の研究員になられた方です。戦争のせいもあって、その研究所が解散になってから東大の人類学教室に移られ、戦後もかなりたって母校に来

られたのですが、相当長かった東大時代の身分は終始助手だったそうですね。私学の同志社の、しかも英文科出身だからというわけでしょう。いかにも東大らしい感じがしますが。

その間、助手とはいえ、先生は全国の貝塚の発掘を手がけられ、貝塚研究では学界でも第一人者と評判されておりましたよ。私は当時毎日新聞の記者として先生からいろいろ教えていただきましたが、国立大学出身の学者とはひとあじもふたあじも違う、接して実に話のたのしい先生でした。こういう方を大学によんでくる同志社というところは、すばらしいところだなというのが当時の私の印象でした。たしかに、いろいろな意味で個性的な人物を育てることのできる同志社でありたいと思いますね。

湯浅　そうですね。いってもせんないことですけど、やはり入学試験に問題がありますね。

岡　入学試験となりますと偏差値が問題になるし、偏差値が問題になるということは、受験戦争への対処一すじに高校生活がしぼられていくわけですね。もっとのんびりと高校生活を送って入れる大学というのを考えないと、これはえらいことになるぞという思いもしているんですけれどもね。

湯浅　でもそれをいうと、せんなくなるわけです(笑)。

未知にたち向う勇気を

岡　話をすこし前にもどして申しますと、大学でなにをやったからなにをしなければいけないとか、大学を出たのだからどういう地位につかなければいけないとかいった考えかたはおかしいですね。そんな考えからは酒詰さんも森さんも絶対に生まれてきませんよね。枠組みを排して、そこからどんどん飛び出して行き、自分の可能性をいろいろ試してみる人生こそ貴重だと思います。

黒岩さんのような作家というお仕事の立場からいえば、枠組みにばかりとらわれていたのではなにも生み出すことができないでしょうね。

黒岩　ぼくらの世界では軽蔑しますね、そういう生きかたというのは。

ヘミングウェーはぼくの非常に好きな作家なんですが、彼は『キリマンジャロの雪』で次のようなことをいっているんです。冒頭の文章で「キリマンジャロというのはアフリカ第一の高山である。四千数百フィートあって年中絶えず雪をいただいている。雪のそばに神の家という場所があって、そこにひからびたヒョウの屍体が一匹横たわっている。ヒョウがなぜそこに行ったかだれも知るものがいない」というふうな言葉なんですけれども、ヒョウというのは肉食動物でしょう。肉のある所しか行かないんですよね。ところがまったくエサになる動物のいない雪に覆われた清冽ないちばん頂上へ行って死んでいるという、この意味というのはすごく大きいと思うんですよ。ヒョウでさえもそこへ行ったではないか。人間は即物的な生活で生きているが、これではたして人間としての価値があるのかと、こういうことをヘミングウェーはいおうとしたんだと思うんですけれども、そういう生き方、つまり未知数に向かって飛び出していく。現在の物におぼれないで、そういうものをめざす。これこそ人間のロマンですよね。こういう考えを持っている人がどしどし同志社の学生になってほしいと思います。

岡　ところが、別に同志社にかぎったこと

ではなく、若い人の間に安定志向がすっかりひろがっておりますね。安全な方向にひたすらながれていこうとする。なんとか勇気を必要とする方向に変えたいと思い、もっと自分を信じて勇気をふるいたたせるようにいってみてもむなしさばかり残ることがしばしばですね。

黒岩　講演にまいりますと、学生のみなさんの表情がみんないっしょなんですよ。顔は違ってても表情はいっしょです(笑)。

岡　なるほど。演壇からごらんになると……。

黒岩　ほんとにいっしょです。不思議ですなあ、あれ(笑)。

岡　教室でもおなじことがいえます。それが私たちにとって一つの大きな悩みなんですがね。

黒岩　ギラギラしたものがないですね。

岡　ありません。そういってしまってはいけないんでしょうけれども、なにか社会全体からそういったものが抜けてしまっていますね。

湯浅　平和なことですわ(笑)。

岡　平和というのは、こういうものなんでしょうか。だけど、平和を維持していくためには大変なエネルギーがいるはずですね。そのエネルギーの持主がだんだん消えていくのではどうしようもないように思いますが。

黒岩　結局は即物的なものに負けているんですよね。ゆたかな物との触れ合いだけで人生を定義してしまって、逆にメンタルという面が脆弱化してしまい、ものを壊す力がないんですよ。これではつまらんですね、人間としてね。

岡　これはどうしたらいいのでしょうね。特効薬みたいなものがなかなかありませんからね。

湯浅　一同志社の問題ではありませんね。

岡　日本人社会全体の問題だし……。なんとかして平和を築き、保つエネルギーとなる理性と勇気の持主を育てることが大切ですね。そのためには国際性を養うことも必要でしょう。

湯浅　同志社の問題にもどしますと、同志社には伝統といいますか、かなり早くから国際性があるわけですよ。これをこれからどう生かしていくか、積極的に考えていくことが必要でしょう。学問研究の面で徹底的にアメリカとつながっていくこと、それが同志社の伝統であり特徴だという勇気をもっていいと思うんです。学問にしてもヨーロッパとつながらなきゃ困るという点もあるのはよくわかりますが、新島襄がアメリカへ行ってきた人ですからね。同志社といえばアメリカなんだ、アメリカ学は同志社でいちばんよく研究されているんだ、しかもアメリカの文学とか政治経済だけじゃなくて、いわゆる文明ですね。人と装置と、そういうものを含めたアメリカ学は同志社から発信するんだというぐらいの学問的な確固たるものもほしいと思いますよ。

岡　その意味では、ロックフェラー財団の援助で、三十余年前からアメリカ研究所が開設されておりますね。さらに活発な研究活動がひろく望まれるというわけですね。

　その一方で、中国や韓国をはじめアジア各国からの留学生が年々たいへんふえてきております。アジア各国が同志社に寄せる期待もまた大きいようにうかがわれます。私どもはそういう期待にも対応できる同志社でありたいと考えております。

　きょうは、長時間にわたって、いろいろと

ご意見をたまわり、ほんとうにありがとうございました。

（一九八八年十二月十三日収録、於大阪グランドホテル）

黒岩　重吾　一九四七（昭和二十二）年旧制大学法学部法律学科卒業

大多　一雄　一九五二（昭和二十七）年大学経済学部卒業

湯浅　叡子　一九五〇（昭和二十五）年旧制大学文学部英文学科卒業

扉のカットについて

東京新報　第十三号　明治六年五月

○亜米利加に在留する日本の少年の事

記事の末尾に「米国在留日本人といへる書中より訳出す」とあるから、アメリカの新聞か雑誌の記事の翻訳であろう。

米国には日本から来た生徒が幾人かいる、その中で「最も大志ありて英敏なる人の例」だとして、概略次のように記されている。

その人は「甚ハだ謙遜」で、姓名はもちろん幼年時の経歴さえその人とわかるように書くことをはばかる。だから具体的な記述はできないが、彼は一八四四年江戸の生まれ（一八四三年が正しい）で、航海術を学び、ある大名の書記をつとめた。のち函館に航してギリシア教の僧に日本語を教えていて、イギリス商館の一書記の援助で米船に乗りこんだ。上海で別の商船に乗り替え、船長の衣服の洗濯や部屋の掃除などをしながらボストンへ着いた、と略記されている。「日本の少年」というのは明らかに新島襄である。滞米中の新島に関する消息は珍しい。

この人は「教育を得んことを願望」し、船長の周旋で学校へ入り、高等の学校にまで進んだ。就学以来、「日本の教法師となりバイブルを説法する人と」なることを望み「ヨハネ福音書」の大部分を日本語に翻訳している。

森（有礼）がこの地を訪ねて彼を知り、官費留学生にしようと言った。彼は丁重に謝辞をのべたあと、「日本の伝法師」になるため「自由に己が好む」学問に従事したいからとこれを謝絶した。日本の天皇には「真実の忠」を尽さねばならぬ、しかし「極善なる友なりし大造化主」に仕える「忠信の道」を失ってはならぬ、と彼は考えている。

その後ふたたび森に請われ、「御雇ならば命を奉ず」と、しばらく大使に従って日本の教育の仕事に従事した（欧米の教育事情視察や、「理事功程」の執筆であろう）。

この人はあと一年で帰国する予定だが、「教法の禁弛まずバ、人民の中の学校の師となりて公然バイブルを説法するを得る時まで」辛抱する考えであり、また「西国の教法ハ日本におゐて心霊の教養の根元なるを論」じた文章を草している。

以上が記事の概要である。残念ながらその原本は詳らかでない。（河野）

プランをドラスティックに！

福本武久

いったい、ここはどこなのだ？　どこかヨーロッパの街にでも、さまよいこんでしまったのか……。田辺キャンパスの石畳の通路を歩きながら、思わず眼をみはってしまった。

田辺町の大学キャンパスを訪れたのは、完成してから一年あまり経った初夏のある日だった。在学時代のサークル仲間が京都で会食しようということになった。二十数年ぶりである。せっかくの機会だから、有志で田辺にもゆこうじゃないか。幹事はわざわざ土曜日を選んだ。けれども集合場所に現われたのは、名古屋からやってきた先輩と私の二人だけだった。

「キミが来てくれてホッとしたよ。おれは、一人でも行くつもりだったけど……」

麻雀の師でもあった先輩は言うのである。

それほど積極的でもなかったぼくは、どうしたものか……と、とまどっていたが、その一言で否応なく近鉄に乗せられるはめになってしまったのである。

バスから降りて、大学のキャンパスに入ると、レンガ造りの建物が真夏を思わせる濃い陽光をあびていた。学生の姿がほとんど見当たらない土曜日の午後……。キャンパスはやたらとひろくて明るい。ぼくたちは、まるで見知らぬ町を訪れた旅行者のようだった。公園もどきの広場で、照れながら写真を撮り合った。渋谷あたりのカフェを思わせる喫茶室でコーヒーをすすりながら、明徳館の薄暗い地下食堂でたむろした当時を語り合った。

「こんな、バカデカい施設が要るのかねえ」

どちらからともなく溜息をもらした。想像をはるかに越えた立派なキャンパスで学生生活を過ごせる若者たちに、ちょっと嫉妬心を抱きもした。

「オリンピックはともかくアジア大会ぐらいなら、やれるほどらしいぜ」

と、先輩は言ったが、自慢の体育施設をみるには、もはや時間がなく、あわてて帰りのバスに飛び乗った。

＊

田辺キャンパスは広い丘陵を造成して誕生した。学生数が増加して、もはや今出川キャンパスだけでは対応できなくなったという物理的な理由からだと聞く。大学の市街地から郊外への移転は、なにも同志社だけではない。中央、早稲田、日大……。周辺部に校地を求める傾向は、さらに増えてゆくだろう。

私の住む所沢にも早稲田がやってきた。同志社と同じように丘陵の造成地にキャンパスができている。やがて日大もやってくるという。市当局は学園都市を標榜しているらしいが、はたして狙いどうりにうまくゆくかどうか。早稲田がきたといっても、学生も教授も街には居つかないのである。登校・下校は最寄りの駅からの送迎バス。街は素通りである。学生には魅力のない田舎町といえば、それまでだが……。同志社と田辺町の関係はどうなのだろう。

同志社の田辺キャンパスにしても、早稲田の所沢キャンパスにしても、学生たちは講義を受けるだけで街を離れ、どこかに散ってしまう。近郊都市に進出したメーカーの生産工場といったら言い過ぎか。クローバー印や稲穂印のおニイちゃん、おネエちゃんを大量生産する隔離された工場を思い描いてしまうのである。大学教育は講義だけではない。キャンパスでの学生同志、学生と教授間の触れ合いだけでもない。大学施設のある街や人との触れ合いからも多くを学ぶ。すべての出会いが「個」の人間性を育んでゆくのである。

今出川校地は京都のどまんなかにある。キャンパスには、いまも同志社の歴史や伝統をいまも伝える精神的なシンボルも残っている。田舎の勉強より、都会の昼寝……。そういう雰囲気のなかにひたるだけでも、無形のメリットがあるだろうと思うのだが、いかがなものだろう。田辺キャンパスができて、同志社がダメになるというつもりはない。ただ同志社のコンセプトとビジョンが、いまあらためて問い直されていると言いたいのである。

＊

大学の施設や設備が充実され、キャンパスが立派になるのは別に悪いことではない。将来をみすえたマスタープランにもとずいていれば、それはそれでいい。ただ容器とシステムはできあがったものの、中身が空洞ではこまるのである。

学制が整備されて教育減ぶ……。これが日本の現状である。六・三・三・四制をくぐってきたら人間はダメになる。確信をもって、そう言いきってもいい。

つい最近、ある私大に学ぶ女子学生から相談を受けた。彼女がまだ小学生だったころに、ひょんなきっかけで知り合い、いまも家族ぐるみの付き合いがつづいている。あと一年あまりで卒業だというのに、彼女は退学したいというのである。どうやら大学のありかたに失望してしまったらしいが、理由をつきつめても、いま一つ釈然としない。最後まで対応のしようがなく、議論はすれちがったままに終った。頭の悪い子ではない。むしろ鋭い感性の持ち主なのである。彼女の悩みの本質は最後まで理解できなかったが、ともかく学生生活のなかで自分を見失ってしまったようである。ひるがえって考えれば、大学には迷路にはまりこんだ彼女を救う何一つの手だてもなかったということになる。ほかにも同じような学生を何人か知っている。

現在の教育システム、そこには一かけらの教育もない。あるのは管理である。大学を出たころには〈個性〉の芽をすっかり摘みとられ、変に角のとれた丸い人間になってしまう。自分の論理を持たず、外見だけ妙にやさしい人間ができあがりつつあるのである。かれらが時代を背負うころになれば、東南アジアの同世代にやられてしまうだろう。創造力にかけては、バイタリティあふれるアジア人留学生のほうが、はるかに可能性があるとみるからである。

文部行政当局がいかがわしい受験産業と手を組んだのは、いつのころからか。中学から高校へ、高校から大学へ……管理と選別は、ますます強化されてゆく。大学のランクづけは入学試験の難易度できまってしまう。もはや受験生自身が大学を自由にえらべない。偏差値という妙なモノサシが志望校を選んでくれる。その結果、ランク上位にある官学のアブレが私学にやってくる。すこし乱暴な言いかたかもしれないが、そういう図式がみえてくるのである。いまや大学ブランドのグレイド付けがきっちりとできあがった。その路線に無抵抗な私学はますます個性を失ってゆくだろう。

私学に入学する者のうち、伝統や学風に魅かれてやってくる者の比率はどれほどなのだろうか。あらためて調査するまでもないだろう。同志社が有名国・公立大のオコボレを頂戴しているようではこまる。あきらかに建学の精神に反してしまう。校祖新島襄は同志社を〈反官学〉と位置付けていたと思うからである。

*

クローバー印のおニイちゃん・おネエちゃんたちのブランドイメージを少しでもグレードアップするには、どうすればよいか。やはり同志社のビジョンを明確にすることしかないだろう。

もはや建学の精神など、すっかり風化してしまっている。創立者の高邁な思想も、現代では空しくひびくだけである。どの私学も同じだろう。にもかかわらず、そっくりそのままお題目のように唱えるだけではダメである。今あるがままの大学の現状と時代に照らして、理念を再構築する必要があるだろう。

もちろん建学の精神から出発しなければ、私学のアイデンティティは失われてしまう。あくまで、それにこだわりつつも現代にマッチするようブレイクダウンして、主体的に行動を起こす。今はそういう時だ。残念ながら教育のビジョンもなければ展開もない……というのが、外部の人間の眼に映る個々の私学の現状なのである。

同志社も例外ではない。たとえば田辺キャンパスができるに際しても、医学部、芸術学部、体育学部などの新しい学部が誕生してもよかったのではないか。

ともかく中途半端はダメなのである。もっとドラスティックにシフト・チェンジする必要があるだろう。

*

入学試験ひとつにしても個性にとぼしい。最近では企業の求める学卒者像についても、すこしずつ変化が生じている。ポスト・インダストリィの時代に突入して、単に〈額に汗して、マジメに働く〉しか能のない人間は敬遠されるようになりつつある。知恵とアイディアにあふれた〈独創性のある人間〉、さらには〈自己主張のある人間〉がもとめられている。学力や知識だけではなく〈何かやってくれそうな〉個性ある人間が待望されているのである。日本の産業

は世界のトップランナーになってしまったから当然だろうが、何も企業に限ったことではない。

このような時代背景からか、最近では〈一芸型〉の人間を受け入れようというねらいで、入試制度を手直しする試みが一部の官学で始まっているが、まだまだ不十分である。私学ならばもっと自由な方法が考えられるのではないか。特別選考は人気スポーツ選手を招くためだけのものではないだろう。

教授陣を始め学内スタッフも見直してはどうか。学内だけで育ったセンセイがたでは、あまりにも視野がせますぎるのではないか。研究者としても教育者としても、いかにもハンパになりはしないかと懸念するのは私だけだろうか。たとえば政治・経済にしてもテクノロジーにしても最先端の情報は、すべて企業や官庁、各種団体にある。国内の外部交流の活発化はもとより、各界のスペシャリストを教授などに招くなど、いろいろ方法はあるだろう。「異」なものを排斥せず、むしろ「異」なものとの出会いを大切にする度量がほしい。新しい創造的なものは、異質と交わるところからしか生れてこない。大学キャンパスを立派にするのもよいが、あまりにも日本的である。教授陣やスタッフの充実にこそ、もっと金をかけたらどうだろう。異なものとの出会いによる活性化に関連して言えば、積極的に世界に学ぶ姿勢が大学教育に導入されてもいい。これからの日本は世界のあらゆる人たちと接してゆかねばならない。卒業してから、どの分野に進もうと外国に出るケースは増えてくるだろう。外国の文化を学び、国際人としての資質がもとめられてくる。

現在の同志社にどれほどの国際化路線が確立されているかは、知らない。しかし、同志社がもっとも同志社らしい特徴を発揮できるとしたら、国際化プログラムではないだろうか。外国に学ぶ気風は、なにせ校祖新島襄の時代からの伝統がある。海外にも同志社とゆかりの深い大学がいくつもあるだろう。それらと連携すれば、プログラムはさまざまに企画できるはずだ。どの学部でも積極的に海外に出たいという意欲のある者には、どんどん機会をあたえたらどうか。課外活動や短期のホーム・ステイでは中途ハンパである。ひとりで海外の大学に送り込むシステムを制度化するのである。たとえばテーマは自己申告、期間は二年でも四年でもかまわない。既存の姑息な単位制なんかにとらわれず、学習成果を評価して卒業資格を認定したらいいと思う。私学ならばこそ、同志社ならばこそ……というシステムがもっとあってもいいだろう。

まもなく大学進学人口が減少傾向になって、私学の経営難が予測されるという。閉学に追い込まれる私学もでるかもしれないと、まことしやかにささやかれている。一般企業なら減量経営で乗りきるところだが、大学はそういうわけにはゆかないだろう。いまからでは、もう遅いのかもしれない。けれども経営という側面からのみアプローチして、小手先の大学運営に終始すれば墓穴を掘るだろう。大学の売り物は教育である。教育の〈質〉がきびしく問い直されてくるのである。あくまで教育問題なのだと認識することが出発点ではあるまいか。

いかにも同志社らしく、リベラルな論議が学内に盛りあがり、そこからユニークな試みが生れてゆくことを念じるのみである。

（作家・一九六五（昭和四十）年大学法学部卒業）

●これからの私学と同志社

日米大学における自治の問題

金田弘光

私がカリフォルニア大学で教えるようになってからもはや二五年になる。その間客員としてイエール大学、オーストラリア国立大学、ガーナ大学などへも出向した。昨年は幸いにも同志社大学経済学部で、客員教授を勤めさせていただいたので、久し振りに母校の雰囲気を満喫させていただいたし、また違った大学教育の実態を垣間見させていただいた。専門外のこととは云え、滞日中には同志社やその他の大学で、日本とアメリカの大学を比較対照し、大学教育について私なりの考えを語る機会が何度かあった。この度はこの誌上で日米の大学を私なりに対比して、これからの同志社大学に期待したいことについて考えてみたい。

アメリカと日本の大学を対比するにあたって何よりも気にかけねばならないのは、まずこの二つの国について所謂「平均」というものの意味が何であるかと云うことだと思う。簡単に云ってアメリカという国は上をみれば限りなく上があり、下を見れば限りなく下がある社会だ。つまりアメリカには、大抵のことについてずば抜けて良く出来る人や、最高級のものが多く、第一級の学校、研究所をはじめ、芸術、文化施設などには正に世界超一流と言ってよいものが多い。その反面では、それこそ箸にも棒にもかからないといったものも、うんざりする程多い。MIT、東部の有名大学や、カリフォルニア大、シカゴ大、スタンフォード大学等には、ノーベル賞を受けた教授陣がそれぞれ十人以上在職しているといわれている。超一流の大学が無数の名も知れない大学と共存している訳だ。このような国については、平均値でものを計ることには意味がない。所謂「標準偏差」の値が大きく、分散値が日本の場合とは比べものにならない位に大きいからである。私のいうアメリカの大学は限られたサンプルに頼らざるを得ないことを御諒承願いたい。

ここでは大学における権利と義務・責任の問題、所謂アカウンタビリティの問題を中心に考えてみたいと思う。そして大学における自治の問題を取上げてみたい。これは当然、㈠教授人事の問題、㈡大学行政の問題にかかわることであり、また㈢学生と教授との関

係、さらに㈣学生の人権の問題であると考えている。私の滞日中の一年間に大学に関して大きな話題となったのは、西部氏の東大教養学部辞職事件であったと思う。どうやら中沢新一氏に対する反発がこの事件の発端であったことは周知のことである。唯この中沢人事の問題ではからずも露呈したのは、教官の任命権が学部レベルの教授会にあるということで、これは日本の大学の自治に関する一連の問題を考える上で、私にとっては非常に興味深い事件であった。

アメリカの有力な大学では、教官の採用にあたって公募制が義務付けられており、まず全国的な学術誌や、教授職専門の求人用定期刊行誌に公募広告を出す。広告文には、どういう資格でどのような分野で研究し、何を教えることの出来る人を求めているかが明記される。応募者は自分の学歴と業績表を送り、指導教授や自分の業績を知る学者などの推薦状を添えて各個に志願する訳である。求人側の大学では（例えば二五〇人乃至三〇〇人の応募者の中から）まず学部の人事委員会で、二五人から三〇人に候補者を絞り、毎年恒例の全国規模の学会で面接を行う。その結果一〇人なり一二人なりを選んで、一人づつ順々に大学へ招待し、公開のリクルーティング・セミナーを催すのである。その席で候補者は教授達や大学院生達の前で、今従事している研究について発表する。セミナーの出席者はそれぞれ自分なりの候補者に対する評価を、学部の人事委員会に提出する。全候補者のセミナーが終ると、委員会はこの評価書を参考にして、その推薦する候補者のリストを作る。教授各員はそれぞれ同僚の評価書をも参考にして学部での審議にそなえるのである。

各学部の審議・投票の結果は、各学部の上に立つディーンに報告される。ディーンの方では教員人事委員会に各学部からの審議報告を検討させる。この委員会とディーンの推薦は、次に学長のところに送られる。学長のレベルでは各カレッジを代表するまた別の教員人事委員会があって、そこで審議が繰返される訳である。従って学部人事が学部だけで決まるような事はあり得ない。大学全体の学部がお互いに納得の行くように、幾つかの段階を経て審議してはじめて、学部の人事が決まる訳である。このような人事のやり方を支えているのは、競争の原理であると同時に、公正を期すというアメリカの常識であると考えてよい。

これに対して日本の有力大学では人事の委員がそれぞれ二、三人の候補者を推薦するという方式をとっているようである。昨年の東大の人事もそのようにして行われたと思われる。これではそれぞれが身近なところで候補者を推薦するようになるのは必然的である。また自分の推す人事がうまく運ばないと、㈠自分乃至は自分の業績をも評価していないことになるか、㈡学部の大多数の同僚達が無能で、西部氏の言葉を借りればゾンビ達だということになり、㈢いずれにしてもそのような連中とは一緒に仕事をすることは出来ないということになるのは当然と思われる。

一九六〇年代の後半にアカウンタビリティという概念がアメリカの教育制度の中に導入された。翻訳すれば、差引き勘定、評価を済まして責任をとるということになるであろうか。この考え方は一九七〇年代後半になってはじめて政策的に重要になってきた。アメリカの大学、更に云えば各学部そして教授各員が、だんだんと深まる財政危機の中で、その存在、生き残りを賭けた課題として、自己を

審査し自己の厳しい評価に取組むことになったのである。このために業績評価というものが、大学の内部でますます重要になったと思う。大学としては、自らの存在理由を根拠付け、世間に明示する必要条件として、公正な教員評価が重要視されるようになった。

これに比べて日本では、大学の運営権（教学権）は実質的に各学部の教授会に属する。これが日本でいう「大学の自治」の根本原則ではなかろうか。教授会は各学部単位で、それぞれ講座を編成したり、カリキュラムを決定する権利を持ち、学生を選考する権利、またその上に学生を処分する権利までをも持っている。そして何よりも、教官の人事権が各学部の教授会にある、といえるのが日本の制度であろう。唯、この日本の制度ではアカウンタビリティという問題がはっきりしていない。個々の教授そして各学部ひいては各大学は、誰に対して、どのように責任をとるようになっているのか。私にはとうとう分らずじまいであった。

私が不思議に思ったのは、大学の先生達が大学の自治を特権的なものにしているのではないかという問題である。責任を取らなくてもいゝ権利を横行しているのではないか。そして教授達は「学問の自由」と「大学の自治」を拠りどころとしていて、内部で、また外部と競争するという刺戟を失ってしまった為に、あたかも流れなくなった水が腐るように、大学自体が自閉化している現実を自覚することがないのではないか。これは将来への大問題であると思った次第である。

カリフォルニア大学の場合、自由は規律なくしてあり得ず、大学教員たることは、権利というより特典であるといってよいと思う。大学という「企画された共同体」と、その中での個人の自由との関係は、発達した産業経済で起る個人の自由と共同体との問題と同じであると考える。大学の根本的な目的は、学問を前進させ知識を広め、そして次の世代の社会人に知的に意義ある人生を送る能力を養うことであると思う。従って各教員もそれぞれの学部も、大学の理想なりその目的を実現する為の道具であり使用人であるに過ぎない。大学がその設立の目的を実現すべく諸々の企画を樹てる以上、それぞれ個人および学部の行動について許される範囲を定め、許容されざることについて制限を加えるのは必然的なことと考えてよい。云い換えれば、教員個人並びに個々の学部の権利は決して絶対的なものでなく、常にその個体が果すべき役割によって定まり、またその役割は究極的な目的に照して決められるものであると考える。

私の大学では助教授、准教授の場合は二年に一度、正教授の場合には三年に一度の割合で厳しい業績審査がある。この審査は教育・研究・職業上のサービスの三部門にわたって行われる。勿論この審査は等級の昇進、昇給に直接関係してくるので、至って現実的であり深刻な問題でもある。

この審議上、講義・授業など学生の教育について教授の成績を評価する為に大変重要なのが「学生からの採点」である。これは大学のアカウンタビリティの一つ、教授職の責任の問題でもある。ただ日本と比べて面白いのは、これが学生自治会の大切な活動の一つになっていることであると思う。カ大の例をとると、学生達が自発的にこの制度を導入したのは、一九六〇年代の中頃であったと憶えて

いる。大げさに云えば、学生達が自分達と教授達との関係を見直そうとして始めたことといってよいと思う。公民権運動などと呼応して、学生達が教授達の権力的な性格を意識するようになったのが当時の事情であった。教える者が教えられる者へアカウンタビリティを負うのが当然と考えたのである。学生側が一方的な受身の立場から、能動的な態度へ脱皮したことを示す大切な出来事であったと、私は考えている。これは一般の大学の自治という問題の中で、学生の自治を考え、学生の人権の問題を考える上で、大切なことであると思う。

「学生からの採点」は各学期末に行われ、学生の委員会がそれぞれの科目の評価簿を作る。学期が終りに近づくと、各教室で二〇項目位にわたって評価とコメントを求める質問書が配られる。学生達は自分が出席している科目の一つ一つについて、担当教授の授業効果、念入りな準備をしているかどうか、授業内容、テキスト、参考文献などをはじめ、宿題や試験問題の教育上の効果、適切さ等について、個人個人がコメントして五段階の格付けの採点をする。自治会の委員会でこの結果が集計され、教授がどれほどの教育効果をあげているかコメントがまとめられる。集計の結果とコメントは学生達の成績が決った後に学部へ送られ、教授個人及び学部の科目編成の評価検討の資料となる。また自治会側ではこの資料を使ってスチューデント・ヴューポイントという分厚い本を作る。この出版物は毎年新学期に売出されている。学生達はこれを参考にして登録する科目を選択する訳である。また学部の方では教授達の業績審査の際に、この評価資料をその他の資料と一緒にまとめて、参考資料として提出することになっている。従って学生の採点・評価は大学の運営、とくに大学の人事行政にとって欠くことの出来ない重要資料の一つである。

教える者が教えられる者へアカウンタビリティを負うということが明らかなもう一つの例は試験と試験の採点であろうと思う。日米の大学では試験の回数が違っている。ヵ大を例にとると、学生達は一年の九ヵ月間に、少くとも二四回、多いと三〇回も試験を受けることになる。試験は採点されると学生に返される。採点者は答案の誤りや出来栄えについて、コメントをつけるのが常識である。学生達は返還された答案を、採点者が別に掲示する「模範答案」と比べて、コメントを参考にしながら採点そのものを検討出来る訳である。教授は試験に責任を持ち、自分の採点に責任を負う。

以前に経済学部の同経会報にも書いたことであるが、同志社で受持の科目の試験の監督をするように頼まれて驚いたことがあった。私がヵ大へ奉職してから長いが、この間に試験の監督をしたことがなかった。これは決して楽しいことではないので、ヵ大では監督をしなくていいから、試験を数多く実施することに抵抗がないのかも知れない。同志社では試験の監督をしなければならない以上、一科目一度だけの試験でもう結構だと思ったことを憶い出す。私にとって試験の監督ほど教授と学生との間を深く断絶させ、教授が学生に対して威圧的になる時は考えられない。同志社大学で何が嫌であったといっても、あれほど嫌だったものは他にない。「試験場で学生証と本人とを見比べて下さい」と云うことであったが、正直なところ私にはこれは出来なかった。

カ大ではここでまた学生自治会が大きな役割を果している。試験の際には所定のカ大の答案用紙（と云っても二〇頁位のノート）に印刷してある「オーナーズ・コード」を再読させ、学生に所定の位置にサインさせる。これは「学生として名誉ある行動の規律」とも云うべきもので、学生自治会が学生自身の合意の上で起草し、遵守しているものである。他人に便宜を与えない、また他人から便宜を受けない、不正をしている者を見付ければ、学生の主宰する法規委員会に通報することを誓う。この委員会は学生によって選ばれ、裁判所のように審判を行い不正が立証されることになれば、担当教授にその事実を報告する。事実が確認されれば、該当学生はその科目について落第になる。私はスタンフォード大学の大学院に四年在籍したが、あの大学でもやはり同じような規律があって、試験の監督は学部レベルの数学や統計学を含めて、一切なかった。

二年程前に発表されたカーネギー財団の報告書は、高等教育の中核たるべき四年制大学が今苦しい混乱期にあると云っている。多くのアメリカの大学が、卒業証書を手渡すことだけが上手になって、卒業資格さえ取ればよいばかりの大学に、成り下っていると云うのである。学生達をみっちりと格調高く教育することに失敗してをり、四年間の大学教育が理性と知能を大切にする生活、充実した質の高い人生に乗り出す為の準備にはなっていないとも云う。学生にどれだけの規律を守らせどのような行動を期待するのか、大学自体がはっきりと自覚していない以上、また教授陣がバラバラな意見しか持っていない以上、大した成果は期待出来ないというのである。しかし、私にはこのカーネギー財団の報告書の云い分が、まさに日本の大学の現状をより深刻に描き出しているように思えてならない。もって他山の石とすべきであると考える。

（カリフォルニア大学デイビス校教授・一九五七（昭和三十二）年大学経済学部卒業）

キャンパスの年輪

―同志社今出川校地―（増補改訂）
B5判二一二頁
一、五〇〇円（送料三〇〇円）
社史資料室長　河野仁昭著

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された彰栄館・チャペルなどの五棟を始め多くの建物あるいは既に姿を消した建物があります。これらの由緒ある建物に限らず石段・記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な美しい書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友・同窓は青春時代を、在学生は多くの先輩が残された業績をしのぶ格好の書としてご購読ください。

◉購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。
◉代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

同志社収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話（〇七五）二五一―三〇三七・八

●これからの私学と同志社

今後の日本と世界——大学教育の役割

前田康博

私の勤めているオフィスからほんの二百メートルばかり離れたところに神田学士会館がある。江戸神田一ッ橋通り小川町、現在の地名は東京都千代田区一ッ橋、安中藩の江戸藩邸跡である。

いつも仕事に疲れると職場を離れ、ここまでやって来て小さな案内板を読む。

新島襄先生が生まれ育った場所である。

七五三太（しめた）という幼名で呼ばれた少年があるときは凧上げに興じ、庭石につまづき、擦り傷を作りながら遊ぶやんちゃな姿が目に浮かぶ。

私がいつも思うのはあの鎖国時代、七五三太少年が藩邸の中でなぜ新世界への旅立ちを思い立ったのか——ということである。

七五三太少年が因習と固陋に満ちた時代の限界を知り、未来を切り開く決意をいつ固めたのか。日本を変えるために「教育」の重要性に気付いていた人は数多いが、どのような日本に変えるか——を知っていた人は少なかった。

新島先生が永眠の直前（一八八九＝明治二十二年）に残した「良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」の言葉を思い出すたび、当時の日本と現在の日本のあまりの相似に驚く。

当時、開拓使官有物払い下げ事件を皮切りに、明治十四年の政変と続き、一方、帝国大学令公布による官僚制度の確立へと進み、統帥権の独立と軍備増強路線は軍国主義への道を切り開くことになった。政界は腐敗し、「人間を造ること」が時代の急務とされた。

新島先生が「良心」を教育の基本に据えた動機の一端をうかがうことができる。それから百年目の今人々は依然として名利を求め、すべてを「カネ」の多寡で量る風潮が社会を覆っている。

〃植えよ人を、輝け自由、我等地に生きむ〃と歌った学歌はキャンパスの外では空しく響く昨今である。

政財官界を網羅したリクルート疑惑などもすでに日本社会が経済的絶頂期を迎えたまま衰退へと向かう兆候の一つと受け止められよう。

明治、大正、昭和と日本の「教育」がたどってきた道は富国強兵政策に基づく国家主義の膨張とぴったり一致していた。国家の教育、国家による教育、国家のための教育が行なわれている中で、真の人間教育が実現できるはずもなかった。

教育の真の目的は人間を磨くことであり、社会の中で自己を正確に位置づけることのできる自我を育てることにある。

「良心の全身に充満したる丈夫」を求め続けた新島襄先生の願いは今もなお教育の原点である。

人間の営みのなかで「教育」ほど奥深く、重要なものはないだろう。

人間社会には政治、経済、文化ありとあらゆる分野の活動が花開いている。おそらく人類の文明はほぼ完成の域に近づいたとみてまちがいない。

それは人類の英知の積み重ねであり、その英知を導き出したものは営々とした「教育」の歴史である。人は学んだものを次代に伝え、より磨きをかけ、洗練させ完成させようとする本能を持っている。自ら会得したもののうちから、選りすぐって若い世代に伝えようとしてきた。教育の根幹は未来を信じるところにある。過去よりも現在よりもなお将来へ希望をつなぎ、より幸せな社会を築こうとする本能である。

文明は英知の継承によって拡大発展してきた。英知の継承、すなわち「教育」は人間の営みの中でもっとも崇高なものとされてきた。

寺小屋での読み書き算盤に始まり、「教育」は貴賤貧富を超えた。教育は人々の明日への期待にほかならなかった。

私はアジアを中心に各国を回る機会があるが、いずれの国も民族もその特徴の源はそれぞれの「教育」にあることが分かる。

具体的には学校教育とその制度の違いとなって表われている。

文明の進歩とともに、当然、教育の内容はより高度化する。

近代科学の発展とともに社会はさらに複雑化し、教育はますます重要とされるに至っている。

日本でも人々の教育に寄せる期待は大きくなる一方、教育の荒廃、形骸化が指摘され、教育の危機すら叫ばれる状態を現出している。

もっと正確に言えば、「教育の現場」である学校の限界がとみに目立ち、教育全体が揺らぎ始めたかのような感を抱かせている。

教育は元来、家庭や人々の生活の場に存在していた。家庭教育という言葉はその一面の性格を残している。だが一般に教育とはすでに「学校教育」をさし示す場合のほうが多くなっている。教育の高度化、専門化に伴ない「教育」の現場が家庭から学校へと移った。学校制度の中で初等、中等、高等と分類される教育はいま危機的状況にある。

長年、「官学」を頂点とするピラミッド型の教育システムは教育の本質を大きく歪めてしまった。

幼年期からの詰め込み学習、受験技術を修得する塾教育、偏差値最優先の学科偏向…がもたらした弊害は枚挙にいとまがない。

私は新聞記者としての仕事のかたわら数年前からいくつかの大学で「国際関係」の講座を持っている。自分の学んだことのなにほどかを社会に還元できればというのが最初の動機だったが、若い世代

との接触から多くのことを逆に学ぶ貴重な機会になっている。それは学生たちから直接得るものがあるというよりも、世代間の比較が可能なところから、特に若い世代の教育に対する考え方を知るにつけ、考えさせられる点が多いという意味である。

毎春、キャンパスに姿を見せる学生たちは一様に偏差値競争、受験戦争をくぐり抜けてきたことを顔に現わし、疲れ切っている。学問への畏敬の念とあくなき探究心に満ちたまなざしを向けるものは数少なく、多くは時の過ぎゆくままに倦怠の日を過ごす。

だが希望を捨ててはならない。

学生たちを目覚めさせるうえで、「大学に学ぶ」真の意味を語り聞かせる教師の熱意に勝るものはない。

「良心の全身に充満した」学生を生み出すことが今の大学に求められているような気がしてならない。

瞳を輝かして、教師の口をついて出る次の言葉を待つ学生たちの姿はいつ見ても素晴らしい光景だ。教育の至高の価値は学生たちの良心を揺さぶるところにある。けっして知識・技術の〝切り売り〟ではない。学生たちも魂の揺さぶられるような教育、そして大学を求めている。

かつて立身出世の方便として誤用された教育は現在、社会的地位、安定した生活、財産形成への基礎的条件として、また社会のエリート層へ仲間入りする「資格」として把握され、依然として有名大学志向の風潮は大きな変化を見せていない。

これも「教育」の真の目的を見失った現象の一つである。

日本人のライフスタイルはここ四分の一世紀をとってみても大きく変わってきている。大学もまたそれを構成する教師、学生の持ち込んだ新しい行き方によって変化を強いられている。その中には変化してはいけないものと、変化すべきものとが混在しており、大事なものが惜し気もなく捨てられたり、すでに不要となった旧弊な事物が厳然と残されていたり、大学教育の場も思考錯誤を脱し切れずもがいている。

政治の腐敗が社会の衰退を招き始めていることは誰の目にも明らかだが、これも人間性を磨き、さらに社会全体の至福を求める「教育」が普及していないことにある。

すべての価値観が「財」の形成に集中し、「カネ」をいかに多く集めるか、「カネ」を集めるためにいかに大きな権力を握るか——に狂奔する人々によって「教育」は歪められてきた。

二百年前、フランス革命で「自由、平等、博愛」の精神が掲げられたが、人類の理想もその中にある。国家、民族を超え、地球的規模で世界を考え、人類の幸福を願う「教育」こそがいま求められている。

国家権力による教育を否定し、人民の意思による教育を実現するために「私学」が役割を自覚する必要がある。

官私を問わず現在の日本の大学が直面している問題の大部分は日本の急激な変化についてゆけず、大きく遅れを取っていることに原因がある。

一番大きな変化は教育を受ける青年たちの変化だが、一方、大学は建物や、立地場所が変わることがあっても旧態依然とした制度、カリキュラム、学部、学科、講座の繰り返しであり、時代の先駆者、

先覚者としての役割はどこにもなく、全ての社会諸機能の中で変化・変質をもっとも恐れる機構と見なされている。

日本はいまでは経済的規模はもちろんのこと政治的、軍事的にも世界の中で大きな位置を占めている。明治、大正、昭和でくくられる時代の日本は世界を見ずに存在できたといって過言ではない。だが〝国際化〟が求められる日本で、教育現場もそれに対応したものでなければならないが、現実の「大学」はどうだろうか。

大学が「学問の府」から事業経営の一形態へと進み、大学のマンモス化は教育の大衆化をもたらした。

他方、大学教育の質的向上は学生数という量的拡大の影に消えてしまった。

日本社会の変化のうちで、もっとも大きなものは出産率の低下だろう。すでに日本の出生率は西ドイツにつぎ世界で二番目に低い。これは人口の高齢化とリンクしているが、同時に日本が成長一途の社会から成熟そして衰亡の社会への大きくシフトしたことを意味している。

いま日本は有史以来例をみない繁栄を謳歌していることに異論をはさむひとは少ないだろう。多くの先例からみて一九七〇年代から始まった日本の経済繁栄は二一世紀を待たず終息し、衰退に向かうとする学説もある。現在を絶頂期として言えることは、今後十数年内にさらに劇的な変化が起きることが予想される。

その一つは休日の増大、余暇の拡大である。余暇時間は労働時間の縮小に伴って増大してきたが、余暇時間の拡大はスポーツや趣味、行楽などに使われるほか「教育」へと向かう。外国語、コンピュータなど技術教育分野はすでに「ダブルスクール」現象として一般化している。初等・中等教育を受けただけで社会へ出た人々には高等教育を受けたいという願望も強い。さらに社会生活を経てさらに高度の教育を求める大学卒業者も潜在的に存在する。

新島先生が「同志社大学設立の旨意」の中で述べた「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教育あり、知識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す」は今の日本にこそ求められるものである。

この言葉は同志社教育の基本理念として今も輝いているが、それをいかに多くの人々に広めるか——は十分に果たされていない。「良心」を強調した教育精神は現在も将来も私たちにとって、日本にとって、いっそう重要な呼び掛けとなるだろう。

（毎日新聞東京本社編集委員、一九六二（昭和三十七）年大学経済学部卒業・中京女子大学客員教授・中央大学商学部兼任講師）

●これからの私学と同志社

私学の精神と誇りを

重森孝子

十年くらい前まではテレビ局に行くと、プロデューサーやディレクターが、国立大学出身か私立大学出身かが少し話していると判った。今はほとんど判らない。中学、高校と同じ様に受験勉強をし、運のいい人が、国立大学へ行き、ちょっと点数が足りなかったから私立大学へ行った、そんな感じである。いったい四年間何をしていたのだろうか、そんな疑問が時々浮かぶ。

ものを創る仕事は、大学など卒業していなくても出来る。気力と体力と忍耐力、それに持って生まれた感性、それさえあれば充分だが、今はその上に学歴が必要である。それは社会のしくみがそうなっているからだけではなく、受験にあけくれた高校までの学生時代から社会の組織にくみ込まれるまでの四年間、いかに自分を研いていくか、自分に何が出来るか。自分との戦いの期間として大学が存在するのだと思う。当然、学んだ大学によって、友人によって、教師によって、それぞれに自分を見つけて行って、社会に出て行く筈だが、最近その特色があまりないような気がしている。長い人生の中でたった四年間、自由に生きられる時を、もっと有効に使っていいと思うが、それが出来難い理由の一つに私学のあり方に問題があると思う。

まず第一に国立と私学との違い、いろいろあるだろうが、私学が何故出来たのか、創立者はどういう意図で学校を創ったのか、創立者の精神を生かした特色が生かされているだろうか。同志社でいえば、キリスト教精神、つまり、人間を愛する心、当り前の事だが、その原点に戻って今の若者達に何を教えるか、経営者理事会が同志社でなければ出来ない教育方針を掲げているだろうか。

私自身は、そんなえらそうなことをいえる人間ではない。在学中もキリスト教精神を勉強もしなかったし、卒業してからも同志社大学卒業生を意識した事は一度もない。ただ、同志社に学ばなければ、今の生き方はしていなかっただろうと、それだけははっきりいえる。

もう三十年も以前の恥を書くと、在学中は映画を見る事と芝居の

裏方をしていた四年間だった。劇団の中にいた男性と、毎日キャンパスではなく街の喫茶店で待ちあわせ、三本立ての映画を見ていた。美学専攻であったから、授業は京都の社寺見学とゼミくらいにしか出席した覚えはない。それでも卒業させてくれた同志社という学校に感謝しているし、四年間、家から解放された自由を味わえたし、その男性と卒業して結婚した。結婚はすぐにだめになったが四年間、映画を見て芝居の面白さを教えてくれた事が今になって役に立っていると思う。

キリスト教精神とは何も関係ないと思うが自由と、いい意味の遊びを四年間で学んだと思っている。

教育というものは、元々、教える人と教えられる人との人間同志のふれ合いだと思っているし、その場所を作ってくれるのが学校だと思っている。

そこで問題になるのが教える人、私達の頃は今より人数が少なかったが教授と個人的に話が出来るのはゼミの時間だけであった。今はどうなっているかは知らないが、教授の人間的な魅力が人生を左右することもあるだろう。学生達から見た教授の魅力は専門の知識は勿論、今迄生きて来た人生観、学校の中だけではなく、世の中に出ても立派にものがいえる人だと思う。

最近、東京のある私学の助教授にいろいろ話を聞く機会があった。その先生はゼミの生徒と野球の応援に行ったり、週に一度はラーメンを皆んなと一緒に食べたりしながら、今の若者達は何を考えているのかを勉強したという。当然、その先生のゼミには学生が集って来る。ところが政治評論家としてマスコミに登場する様になって学生と遊ぶ時間が無くなった。人気が落ちるかと思たら、以前よりゼミの学生が多くなった。学生達は有名な先生のゼミに入ったら就職を斡旋してくれるだろうと思って集って来るという。国立大学に入っていれば官僚のエリートコースは約束されていたのに私学にしか行けなかったから、出来るだけいい所に就職したいという。大学生活を就職のための準備期間と考えるのも今の世の中では仕方がないと思うが、そんな学生に精神論を話しても、創立者の意図する所を教えても何の役にも立たない。教授陣からは、マスコミにチヤホヤされる事で冷たい目で見られて、いつまでたっても助教授のままだと、なげいておられた。学生にも教授にも今の教育制度が身についてしまっているのをなんとかしなければと、教育の現場の方達は考えておられるだろうが、これから進学人口が減少して来る時代にそなえて、校舎を広げたり、学生を集める事だけに専念しないで、中味をもっと考えてほしいと思う。

入学試験も、学力だけで選考するのではなく、レポートと面接で、それぞれの個人の能力を生かせる可能性があるか、人間としての基本を持ちあわせているか、将来、何が出来るか、そこまで見きわめる入試制度を取り入れる事は不可能でしょうか。選ぶ側の私学も、創立者の精神をかかげて呼びかけ、選ばれる側の学生に、どうしてもこの大学で勉強したいという意欲を持たせるのが私学の本来のあり方だと思う。

理事会、教授陣、学生達、それに評議会、事務局、私学を支えている人達がプライドを持って、国立大学と違う私学の存在理由を主張出来るだけのポリシイを持って下さい。

もう一つ、卒業生にとって大事なのは同窓会の活動。東京にいていつも感じるのは、私学の中の一つ早稲田大学、卒業生の先輩、後輩の意識の強さに驚かされる時がある。どんな会合でも、会が終ると校歌を唱って、同窓意識をお互いに確かめあう。それは母校を誇りに思う気持と同時に、四年間同じ学校で何かを学んだという意識を常に持っているからだと思う。

創立百十三年を迎えた同志社大学が、原点にかえって教育改革に取り組んで下さる事を祈っています。

（脚本家・一九五九（昭和三十四）年大学文学部文化学科卒業）

同志社の絵葉書シリーズ発行

茜色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花爛満の啓明館（旧図書館）、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴れ親しんだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しました。

従来から同志社の絵葉書は写真・絵・版画などで発行されていますが主に記念品としてのものが多く、今回は趣きをかえて学校・建物などをまとめ、広く使われるものをと、校友秋山真邦・宇佐美宏両氏に撮影制作を依頼、その出来栄えは多くの方々から賞賛の言葉を受けています。

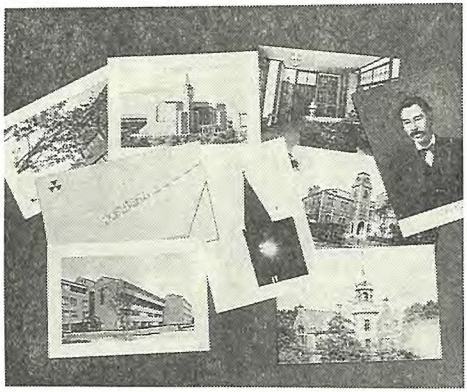
講入ご希望の方は、直接電話または文書でお申込みください。

なお代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

〈内　容〉

◎重要建築物
◎新島襄の面影
◎大学今出川校地
◎大学田辺校地
◎女子大学今出川校地
◎女子大学田辺校地

定価各組とも
六枚一組二百五十円
（送料七十円）



発行所　同志社収益事業課

電話　（〇七五）―二五一―三〇三七・八

●これからの私学と同志社

同志社への期待

富森叡児

教育には全くの門外漢であり、おまけに同志社を離れて久しい私がこうした表題で筆をとることには正直いって気が重かった。しかし、よく考えた末、同志社出身としてはやや特異な経歴の私が感想めいたことを綴ることによって、問題をかかえるこれからの学校運営に役立つこともあるかと思い直した。したがって、思い違いや見当外れも多々あると思うがお許しいただきたい。

特異な経歴と言ったのは、私はいわば純粋培養の同志社人として育ったということ。祖母が同志社女学校の寮の舎監をしており、両親とも大学で教鞭をとった、私自身、中学、予科、大学と同志社一本で来た。しかし、卒業後は逆に同志社と全く無縁のところで働いて来た。東京で朝日新聞の政治記者をやっていたわけだが、まわりに、同志社出身者は皆無に近かった。大学時代のゼミに在籍した後輩たちと先生を中心に時折集まることはあったが、同窓会にはほとんど出席したことがなかった。同志社人として行動し、同志社を語る機会をあまり持たずに過して来たということだろう。

日本人はとかく群れたがる習性がある。竹下首相を中心に早稲田出身の国会議員が与野党を問わずに団結するのがその好例である。母校を中心に群をつくる光景に接するたびに、群れる相手の居ない私は「同志社って、一体何なんだろう」と自問したものである。

そもそも新島襄先生は何のつもりで同志社を創設されたのか。先生は米国留学中、右大臣岩倉具視を団長とする欧米視察団の道案内をつとめられた。その中に教育制度調査担当の理事官田中不二麿がいた。田中は新島先生の人柄、力量に相当ほれこんでいたようで、後年文部大輔となった彼は同志社創設のため苦闘中の先生を京都にたずね、教育行政の重要ポストにつくよう勧誘した。しかし、先生は断固これを拒否された。その拒否の理由の中に、先生の同志社創設の目的が凝縮されてあるように思う。そのひとつは、もちろん、キリスト教による日本教化であった。当時の先生の頭にまずこのことがあったことは疑う余地はない。「私の生命は私自身のものではない。主イエスに捧げたものである」と言い張る先生に対して、根

負けした田中は「新島君、君は真に耶蘇教の奴隷じゃ」と歎いたと伝えられる。

それならば、先生はキリスト教の伝道者の養成だけを目的とされていたかというと、もちろん、それだけではない。田中に対して「山紫水明の京都の地において、将来日本を背負うような幾多の立派な青年を教育し、かれらを社会に送り出し、自分の熱愛する国家につくすことこそはるかに有益な事業と信ずる」むねを論じておられる。また、これより先、伝道師を養成する神学校の設立を主張する米国教団に対して、それだけでは最優秀の日本青年は集まらないとし、キリスト教主義に立脚し、「近世学術の新知識」を教える大学の設立を主張しておられる。

第一の目的に関しては、同志社は幾多の著名な伝道者を育て、日本にキリスト教をひろめるうえで大きな役割を果した。切支丹排撃がしみついている風土であり、また、同志社の属する宗派が米国でも知識階級を基盤とするものであったこともあって、その伝道はなかなか大衆レベルに浸透しないうらみはあった。それにしても、同志社創設後、短日月の間に組合系の教会が日本全土に設立されていく姿は眼をみはるものがあった。

しかし、第二の目的に関してはどうだったろうか。卒直に言って、まだ不十分と言わざるを得ない。たしかに、同志社はこれまで多くの分野に有能な卒業生を多数送り出した。私の知る限り、同志社人はあまり群を作らないし、同志社出身であることを口にしない。それでも、いろんな分野、組織の中で重責を担い、黙々と頑張っている同志社人を数多く知っている。しかし、新島先生がいわれる「日本を背負う」ということはこの程度のことだったのだろうか。

私はそうは思わない。新島先生の頭の中には米国の社会で私立大学の果している役割が強くイメージされていたと思われる。米国においては私学が主流であり、政財官界をはじめ各界のトップがほとんど有名私大の出身者で占められていることは周知の事実である。しかも、大学は一部を除いて、政治、経済の中心から離れた静かな大学町にある。京都にキリスト教主義の私立大学をという新島先生の発想は、まさにこの米国型大学から出ていることは間違いない。

しかし、当時の日本は米国とは全く異質の社会であった。徳川三百年にわたる鎖国と専制統治は世界に例をみない貫徹した上意下達の構造であった。各藩は幕府に生殺与奪の権をにぎられており、末端の人民も五人組などの組織を通じて常時監視されていた。お上の意向にさからえば、生きてゆけない制度であった。日本人の欠点のひとつとされる集団主義、大勢順応主義はもともと農耕民族に特有の横ならび意識に源を発するものだろうが、それは徳川三百年の間に更に強められ、極度の域に達したのだと思う。もともと素地のあったところへ、三百年かかって徹底的に固めたものが一朝一夕で変るわけがない。明治維新が下からの革命でなく、外圧による変革であったことも手伝って、日本社会の特性はほぼそのまま温存された。憲法が制定され、帝国議会は開設されたものの、議会には事実上何の権限も与えられず、ほとんどの権限は超然主義に基礎をおく内閣に集中していた。また、軍事問題での決定権は陸海軍の統帥部が握っており、議会の介入は許されなかった。徳川時代に〝お上〟として君臨していた武士階級に代って、官僚つまり〝お役人〟が事

実上明治憲法下の日本を支配していたのである。一般民衆も徳川時代同様〝長いものにはまかれろ〟とばかり順応して来た。やがて軍部と官僚は手をにぎり、日本特有のテクノクラート・ファシズムの体制をつくりあげ、国民を戦争へとかり立てていくのである。

このような社会で、キリスト教主義に立脚し、同志社大学設立の旨趣にある「知識あり、品行あり、自ら立ち、自ら治むるの人民」は第一義的には求められなかった。明治以来の国策である富国強兵を効率的に推進する人物がまず必要とされたのである。同志社がその歴史が古いにもかかわらず、いわば二流の大学に甘んじねばならなかったのは、誰の故でもない。日本社会の特異な発展と同志社立学の精神が整合しなかったことが大きかったと私は思っている。

新島先生がこの事にどの程度気づいておられたのか。何よりもまず情熱の人、行動の人であった先生は、利害得失の分析などあまり頓着されなかったと思われる。しかし、先生の理想とする大学を日本で花開かせるのは至難の業であることは十分認識しておられたようだ。勝海舟に対して、大学設立の旨趣を説明されたとき「あなたのはじめる学校の完成は幾年を要する見込みですか」とたずねる勝に対して「拙者一代において到底完成できません。二百年はかかると思います」と答えられたことからもうかがえる。

敗戦によって憲法は変わり、日本の政治の枠組は一変した。しかし、日本固有の体質はかなりの部分残った。前述したように、制度が変っても意識の変化はそう簡単に進まないということがまずある。更に、占領軍当局が日本統治を円滑に遂行するため、占領行政の協力者を官僚群に求めざるを得なかったこともあった。公職追放に関しても、占領軍は官僚に対してはかなり甘い基準で臨んでいる。極東の冷戦が激化するにつれて、官僚機構の温存は、占領軍当局にとって一層必要となった。内務省の解体や議会権限の強化など改革はあったものの、官僚出身の政治家を含めた広い意味での〝官僚勢力〟の優位は動かなかった。

しかし、戦後四十年の間に、官僚優位の構造は除々に崩れつつある。とくに、ここ十年程の間にその傾向は加速されつつあるように思える。通信・交通の技術革新によって、国際化は猛烈なスピードで進行した。経済立国を目指す限り、国際的孤立は絶対避けねばならない。国際化の波に積極的に乗る以外に日本の生きる道はないのである。外国とあまりに違う制度、外国人に全く理解されない発想はいや応なしに変革を求められる。少なくとも外国人に理解させ、納得させることが求められる。法令や前例にがんじがらめにしばられ、変化になかなか対応しようとしない官僚的思考ではどうにもならなくなっているのである。一連の自由化政策や国鉄、電々の民営化など政府が外圧に抗し切れず踏み切った諸施策も結果として官僚の権限縮少につながらざるを得ないのである。

二十一世紀はソフトの時代ということがよく云われる。技術革新によって、いくらすぐれたハードが出来上っても、それを使いこなすソフトが確立されない限り、宝のもちぐされになる。ひどくすると、人類文明の前途に暗影を投げかねない。きちんとしたソフトはバランスのとれた知性、柔軟な発想、素早い対応、品位ある個性を備えた人材によって、はじめて開発されると思う。百年前に同志社が目指した「知識あり、品行あり自ら立ち、自ら治むるの人民」の

育成こそ、これからの時代にピッタリということが出来よう。

この意味で、私は二十一世紀こそ同志社の時代ではないかと思っている。少なくとも、建学の精神が十分生かされる時代がやっと来たということであろう。「其の生徒の独自一己の気象を発揮し、自治・自立の人民を養成するに至っては、これ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず」と同志社大学設立の旨趣は唱っているが、今後は公立、私立を問わず、こうした教育方針が主流にならざるを得ないと思う。

このため、今日の同志社に求められることは立学の原点にいま一度立ち返って、その精神を十分かみしめることであろう。その結果二十一世紀が同志社の時代であるとの満々の自信を持って、全学が学問・教育に取り組むことではないかと思われる。もちろん、時代の求める人材育成のためには、教職員の強化、設備や機関の整備、カリキュラムの充実も重要であろう。しかし、その根底にこの自信がない限り、魂のこもったものにならないし、他の大学にくらべ同志社の魅力をアピールすることにならない。

新島先生は病状の悪化した明治二十三年一月、一同志社生徒に書簡をおくり次の様に述べておられる。

「吾党の中、近眼にして小成に安んずるもの多く、……悠々無頓着に日を送る者多し。何の効能もなく、アンビションもなく、アスピレーションもなく、敢為の元気もなく、ヌラヌラ然たる骨なきナマコの如き者多し」

当時の学生の一部に蔓延していたと思われる無気力を痛烈に指摘しておられる。

われわれが中学時代によく歌った同志社の歌の一部に

比叡おろしに　うそぶけば
紅塵いつか　影ひそめ
相国寺畔に　豪気満つ

というのがあった。

この歌の文句とうらはらに、当時の学園は「豪気満つ」という雰囲気ではなかったと記憶している。この歌がいまも歌われているのかどうかも知らないし、まして、今日の同志社内の雰囲気がどのようなものか聞いていない。

過去の同志社に無気力がひろがっていたとしても、或程度止むを得なかったと思う。富国強兵に向って怒濤のように進んでいた明治の日本にあって同志社は明らかに異端であり、取り残される宿命を負っていた。私が中学に学んだ第二次大戦下の同志社も当局から、社会全般からうさんくさい眼でみられる存在であった。

しかし、これからの同志社にはそういうことは考えられない。万一、それでも無気力がひろがるとしたら、少なくともその原因を外部に転嫁することは出来ない。

「豪気」とは広辞苑によれば「壮快な意気」とある。壮快な意気は強烈な自信の裏づけがあって、はじめてほとばしり出るものであろう。

百年以上前、新島先生がまさに逆流を突き進む、必死の思いで練り上げられた大学設立の旨趣が今日の時代にピッタリのものであることは驚くべきことである。このことに大きな自信をもち、豪気満ちあふれる学園であることを期待したい。

（朝日新聞社取締役西部本社代表・一九五一（昭和二十六）年大学文学部卒業）